

奈良市埋蔵文化財調査概要報告書

(第2分冊)

平成9年度

1998

奈良市教育委員会

奈良女子大学図書



奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成9年度(第2分冊) 正誤表

頁	箇所	誤	正
本文目次	6行	平城京左京五条六坊一坪の調査 第368次	平城京左京五条六坊十一坪の調査 第368次
調査一覧	圖4(376)	平城京左京六条一坊十五坪	平城京左京六条一坊十三坪
調査一覧	圖4(386)	平城京右京三条四坊七坪	平城京右京三条四坊十一坪
P 1	15行	奈良時代以前	古墳時代以前
P 2.3	14行	東側溝心はX—	東側溝心 ¹⁾ はX—
P 4.2	29行	壁間(3.0m)	壁間2間(3.0m)
P 5.8	表・106	四条一坊下ツ道東側溝 日J389次	四条一坊下ツ道東側溝 日J328次
P 5.8	表・116	-147.353.877	-147.353.887
P 5.8	表・126	-147.353.877	-147.353.887
P 5.8	表・136	六条一坊下ツ道東側溝 日J103次	六条一坊下ツ道東側溝
P 5.8	表・146	六条一坊下ツ道西側溝 日J103次	六条一坊下ツ道西側溝
P 7.7	18行	西へ3番目	西へ2番目
P 8.1	表 (97-160)	現状：遺構検出面：	現状：水田 遺構検出面：

奈良市埋蔵文化財調査概要報告書

(第2分冊)

平成9年度

00101225

1998

奈良市教育委員会



第393次 井戸 S E05出土土(泥)埴



第393次 井戸 S E05出土銅鈴



第375次 河川01出土 絵画土器

はじめに

私たちが暮らしている奈良市の地下には、数多くの遺跡が眠っています。これらの遺跡は奈良市の歴史を語るあかしで、私たちが将来へ受け継いでいかななくてはならない貴重な遺産です。

奈良市では、こうした数多くの遺産を保護していくための調査活動を行っており、その成果を毎年度の調査概要報告書にまとめております。本書は平成9年度に行った民間開発事業に係る発掘調査成果の概要をまとめたものです。ご一読いただき、私達の活動に対しまして忌憚のないご意見をお寄せ下さいますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、発掘調査にご協力いただいた方々、本書をまとめるにあたってご指導、ご協力くださった関係機関の皆様に対しまして厚く御礼申し上げます。

平成10年12月

奈良市教育委員会
教育長 河合 利一

例 言

- 1 本書は、平成9年度に奈良市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査のうち、発掘原因者の費用負担による発掘調査の概要報告をまとめたものである。また、昭和56年に行った第20次調査、平成7・8・9年度に実施して、未報告であった平城京第338・365・366・368・370次調査についてもあわせて報告する。
- 2 調査の体制については下記の通りである。なお、各調査の担当者は発掘調査一覧に示した。

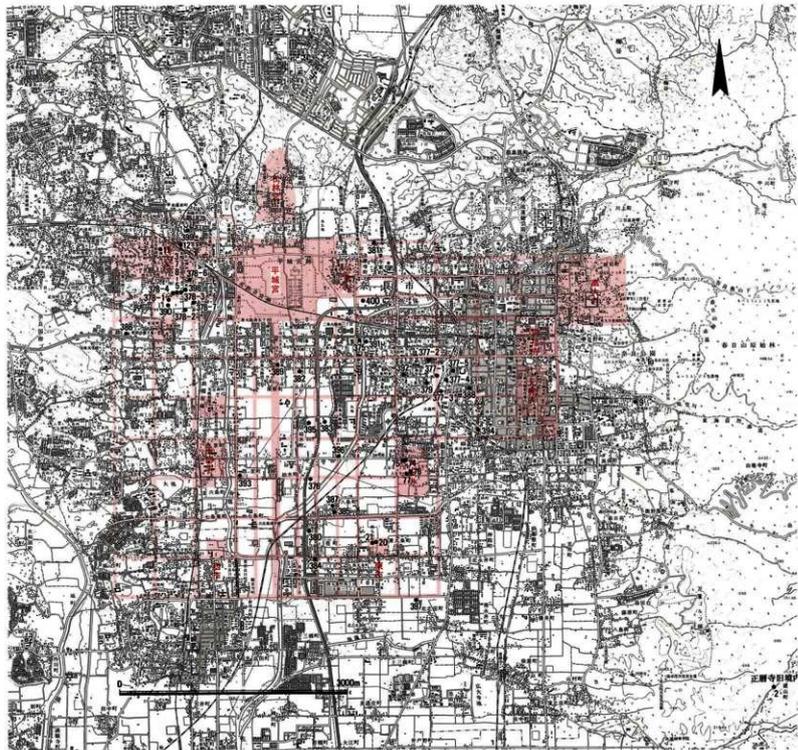
社会教育部 文化財課	課 長	西村廣彦	主 幹	森川倫秀
埋蔵文化財調査センター	所 長	高谷明男		
庶務係	係 長	杉村武史	事務吏員	山形和広
調査第一係	係 長	西崎卓哉		
	技術吏員	立石堅志	三好美穂	鐘方正樹
		安井宣也	久保邦江	宮崎正裕
		原田香織	細川富貴子	大窪淳司
調査第二係	係 長	篠原豊一		
	技術吏員	森下浩行	秋山成人	武田和哉
		原田憲二郎	久保清子	池田裕英
				山前智敬
				中島和彦
- 3 発掘調査と本書の作成にあたっては、奈良国立文化財研究所、奈良県教育委員会、奈良市文化財保護審議委員会など関係諸機関から御指導と御教示を賜った。記して感謝致します。
- 4 発掘調査と出土遺物の整理には、埋蔵文化財調査センターの作業員、補助員の方々のご助力を得ている。記して感謝いたします。
- 5 各発掘調査の次数は、奈良市教育委員会が実施した調査に付した遺跡ごとの通算次数である。
- 6 本書の執筆は埋蔵文化財調査センター職員が分担して行い、文末に文責を明らかにした。
- 7 本書で使用した遺標の分類番号や遺物の名称、型式は奈良国立文化財研究所および奈良市教育委員会の刊行物に準拠している。ただし、遺構番号は調査ごとに付した仮番号である。
- 8 本書の遺構図、土層図に示した座標値は国土調査法に定める国土方眼方位第Ⅵ座標系によっている。標高は海拔高である。
- 9 古墳時代以前の遺標を検出し、遺跡名を付す場合には、大字名を遺跡名としている。
- 10 本書の編集は埋蔵文化財調査センター職員の協力を得て、篠原豊一、池田裕英が担当した。

本文目次

I	平城京跡の調査	
1	柏木遺跡・平城京左京五条一坊十六坪の調査	第338・370次……………1
2	平城京左京四条一坊十三坪の調査	第365次……………16
3	平城京左京三条一坊十一坪の調査	第366次……………22
4	平城京左京五条六坊一坪の調査	第368次……………24
5	芝辻遺跡・平城京左京三条三坊三坪の調査	第375次……………27
6	平城京左京六条一坊十三坪の調査	第376次……………41
7	平城京左京四条一坊十三坪の調査	第382次……………44
8	大安寺遺跡・平城京左京五条二坊三坪の調査	第20・383次……………45
9	杉ヶ町遺跡・平城京左京四条五坊十二坪の調査	第388次……………51
10	下ッ道・平城京朱雀大路の調査	第389次……………57
11	平城京左京三条三坊三坪の調査	第391次……………59
12	平城京右京六条一坊十二坪の調査	第393次……………62
13	平城京左京(外京)東五坊大路の調査	第394次……………67
14	平城京右京一条北辺三坊二坪の調査	第399次……………71
15	平城京東市跡推定地の調査	第20次……………73
II	平城京内寺院跡の調査	
1	西大寺旧境内の調査	第12次……………75
III	小規模確認調査・試掘調査・工事立会	
1	小規模確認調査・試掘調査……………	81
2	工事立会……………	82

平成9年度 概要報告書掲載内訳および調査一覧

	次数	遺跡名	調査地	調査期間	調査経緯	事業名/事業内容	記録番号	担当者	
第1分冊	640-377-01	平城宮東宮東部大甍	三条町225番地	1989.04.25-1989.07.16	1250㎡	奈良県庁/奈良県国史・土地区画整理推進事業(建設)	863-3055	大塚洋一 藤川	
	02	平城宮西宮西側土坑(六坪)	三条町225番地1号	1989.08.04-1989.10.23	700㎡	奈良県庁/奈良県国史・土地区画整理推進事業(建設)	863-3055	大塚洋一 藤川	
	03	平城宮西宮西側土坑(五坪)	三条町225番地	1989.11.10-1989.12.15	300㎡	奈良県庁/奈良県国史・土地区画整理推進事業(建設)	863-3055	大塚洋一 藤川	
	40	平城宮西宮西側土坑(三坪)	三条町225番地	1989.04.25-1989.07.16	375㎡	奈良県庁/奈良県国史・土地区画整理推進事業(建設)	863-3055	大塚洋一 藤川	
	05	平城宮西宮西側土坑(三坪)	三条町225番地	1989.04.25-1989.07.16	140㎡	奈良県庁/奈良県国史・土地区画整理推進事業(建設)	863-3055	大塚洋一 藤川	
	378 (1)	平城宮西宮西側土坑(三坪)十一坪	菅野町43-1地	1989.05.06-1989.08.29	1,950㎡	奈良県庁/奈良県国史・土地区画整理推進事業(建設)	863-3056	立石 重雄	
	02	平城宮西宮西側土坑(三坪)五坪	菅野町102-4地	1989.07.05-1989.09.04	400㎡	奈良県庁/奈良県国史・土地区画整理推進事業(建設)	863-3056	立石 重雄	
	03	平城宮西宮西側土坑(三坪)七坪	菅野町15-1地	1989.07.25-1989.10.02	2,500㎡	奈良県庁/奈良県国史・土地区画整理推進事業(建設)	863-3056	藤井 康平	
	40	平城宮西宮西側土坑(三坪)七坪	菅野町15-1地	1989.09.22-1989.12.05	900㎡	奈良県庁/奈良県国史・土地区画整理推進事業(建設)	863-3056	立石 重雄	
	05	平城宮西宮西側土坑(三坪)七坪	菅野町26地	1989.12.09-1989.03.27	2,500㎡	奈良県庁/奈良県国史・土地区画整理推進事業(建設)	863-3056	奈良 隆夫	
	00	平城宮西宮西側土坑(三坪)一坪	西大寺南町2283	1989.04.16-1989.02.06	320㎡	奈良県庁/奈良県国史・土地区画整理推進事業(建設)	863-3056	藤井 康平	
	03	平城宮西宮西側土坑(三坪)一坪	菅野町191-2地	1989.04.28-1989.03.27	700㎡	奈良県庁/奈良県国史・土地区画整理推進事業(建設)	863-3056	藤井 康平	
	379	平城宮西宮西側土坑(三坪)十一坪	上大寺南町40号	1989.06.02-1989.06.26	150㎡	奈良県庁/奈良県国史・土地区画整理推進事業(建設)	869-3022	大塚洋一 藤川	
	380	平城宮西宮西側土坑(三坪)十一坪	上大寺南町40号	1989.06.30-1989.07.25	300㎡	奈良県庁/奈良県国史・土地区画整理推進事業(建設)	869-3037	吉岡	
	381	平城宮西宮西側土坑(三坪)十一坪	比叡寺町1311-2	1989.07.03-1989.07.14	210㎡	奈良県庁/奈良県国史・土地区画整理推進事業(建設)	869-3038	山田 隆	
	384	平城宮西宮西側土坑(三坪)十一坪	西大寺南町3丁目16-4地	1989.08.09-1989.09.05	100㎡	奈良県庁/奈良県国史・土地区画整理推進事業(建設)	869-3038	吉岡	
	385	平城宮西宮西側土坑(三坪)十一坪	八条一丁目802-1地	1989.09.04-1989.09.12	770㎡	奈良県庁/奈良県国史・土地区画整理推進事業(建設)	869-3109	山田 隆	
	387	平城宮西宮西側土坑(三坪)十一坪	八条一丁目796-2地	1989.09.05-1989.10.08	106㎡	奈良県庁/奈良県国史・土地区画整理推進事業(建設)	869-3110	山田 隆	
	390	平城宮西宮西側土坑(三坪)十一坪	菅野町269-1地	1989.12.17-1989.03.27	1,200㎡	奈良県庁/奈良県国史・土地区画整理推進事業(建設)	863-3056	藤井 康平	
	392	平城宮西宮西側土坑(三坪)十一坪	三条町225番地	1989.12.10-1989.12.26	110㎡	奈良県庁/奈良県国史・土地区画整理推進事業(建設)	869-3254	吉岡	
	395	平城宮西宮西側土坑(三坪)十一坪	船場守町内	1989.01.16-1989.02.03	460㎡	奈良県庁/奈良県国史・土地区画整理推進事業(建設)	869-3243	吉岡	
	396	平城宮西宮西側土坑(三坪)十一坪	大宮町二丁目30-2番地	1989.01.20-1989.02.18	240㎡	平城宮西宮西側土坑調査	奈良 隆夫		
	397	平城宮西宮西側土坑(三坪)十一坪	北之町2内	1989.01.19-1989.01.26	240㎡	奈良県庁/奈良県国史・土地区画整理推進事業(建設)	869-3249	三好	
	398	平城宮西宮西側土坑(三坪)十一坪	菅野町2120	1989.01.26-1989.03.27	450㎡	奈良県庁/奈良県国史・土地区画整理推進事業(建設)	863-3056	三好	
	400	平城宮西宮西側土坑(三坪)十一坪	比叡寺町208-1地	1989.02.16-1989.02.26	80㎡	奈良県庁/奈良県国史・土地区画整理推進事業(建設)	869-3250	吉岡	
	60DA-75	史跡大宮守御所跡	大宮町二丁目1142-1	1989.11.27-1989.12.25	61㎡	奈良県庁/奈良県国史・土地区画整理推進事業(建設)	869-3086	藤下 直	
	76	史跡大宮守御所跡	大宮町一丁目1292-1	1989.03.02-1989.03.16	40㎡	大宮守御所跡調査	1339-1841	藤下 直 菅田 隆	
	68SD-11	西大寺跡地内	西大寺南町32番地	1989.04.14-1989.06.17	200㎡	奈良県庁/奈良県国史・土地区画整理推進事業(建設)	869-3062	藤井 康平	
	68ST-9	新藤原寺跡地内	新藤原1359-2地	1989.12.15-1989.12.19	40㎡	六本塚子 古墳調査(七畝等)	869-3089	武田	
	49SD-2	新藤原寺跡地内	山鹿町内	1989.01.27-1989.01.28	110㎡	奈良県庁/奈良県国史・土地区画整理推進事業(建設)	869-3223	三好	
	第2分冊	6A10-150X(下巻)	新藤原寺跡地内(三坪)十六坪	船場町383-1地	1989.04.07-1989.05.29	1,600㎡	新藤原寺跡地調査	887-3017	大塚洋一 藤川
		375	史跡大宮守御所跡	大宮町519-7地	1989.04.07-1989.06.13	316㎡	奈良県庁/奈良県国史・土地区画整理推進事業(建設)	869-3212	藤下 直 菅田 隆
		376	平城宮西宮西側土坑(三坪)十一坪	八条一丁目802-1地	1989.04.21-1989.05.21	150㎡	奈良県庁/奈良県国史・土地区画整理推進事業(建設)	869-3068	藤川
		382	平城宮西宮西側土坑(三坪)十一坪	船場大工町54番地	1989.05.16-1989.06.04	100㎡	奈良県庁/奈良県国史・土地区画整理推進事業(建設)	869-3067	藤川 菅田 隆
		383	大宮守御所跡地内(三坪)十一坪	大宮町519-10地	1989.05.22-1989.06.27	625㎡	奈良県庁/奈良県国史・土地区画整理推進事業(建設)	868-3355	藤下 直 菅田 隆
		388	新藤原寺跡地内(三坪)十一坪	船場町7-4地	1989.06.06-1989.07.06	345㎡	足利氏宅跡/奈良県国史・土地区画整理推進事業(建設)	869-3127	藤川 隆
		389	下大寺跡地内(三坪)十一坪	上大寺南町2丁目961	1989.06.06-1989.07.17	450㎡	奈良県庁/奈良県国史・土地区画整理推進事業(建設)	869-3039	大塚洋一
		391	平城宮西宮西側土坑(三坪)十一坪	大宮町四丁目462-10地	1989.11.25-1989.12.26	280㎡	奈良県庁/奈良県国史・土地区画整理推進事業(建設)	869-3137	山田 隆
		393	平城宮西宮西側土坑(三坪)十一坪	比叡寺町140-1	1989.12.22-1989.01.30	270㎡	奈良県庁/奈良県国史・土地区画整理推進事業(建設)	869-3140	山田 隆
394		平城宮西宮西側土坑(三坪)十一坪	比叡寺町150	1989.01.07-1989.02.03	300㎡	奈良県庁/奈良県国史・土地区画整理推進事業(建設)	869-3022	武田	
399		平城宮西宮西側土坑(三坪)十一坪	西大寺南町一丁目170	1989.02.05-1989.02.28	220㎡	奈良県庁/奈良県国史・土地区画整理推進事業(建設)	869-3141	藤川	
6A11-20		平城宮西宮西側土坑(三坪)十一坪	船場町7-1	1989.05.25-1989.05.30	305㎡	足利氏宅跡/奈良県国史・土地区画整理推進事業(建設)	869-3024	山田 隆	
60SD-12		西大寺跡地内	大宮町519-200-4地	1989.03.04-1989.03.27	130㎡	六本塚子 古墳調査	869-3139	武田	
第3分冊		70SD-1	史跡大宮守御所跡	船場町南町	1989.05.25-1989.08.29	570㎡	奈良県庁/奈良県国史・土地区画整理推進事業(建設)	867-3146	三好
		40DA-34	史跡大宮守御所跡	大宮町一丁目11地	1989.01.18-1989.01.21	90㎡	奈良県庁/奈良県国史・土地区画整理推進事業(建設)	868-1063	藤下 直 菅田 隆
	68R-386	平城宮西宮西側土坑(三坪)十一坪	西大寺南町	1989.09.08-1989.11.28	800㎡	奈良県庁/奈良県国史・土地区画整理推進事業(建設)	869-3152	三好	
	6A17-21	平城宮西宮西側土坑(三坪)十一坪	宝来町30	1989.11.11-1989.01.14	300㎡	奈良県庁/奈良県国史・土地区画整理推進事業(建設)	869-3022	藤川 隆	
	60DA-77	史跡大宮守御所跡	大宮町二丁目1299-1	1989.03.09-1989.03.29	150㎡	奈良県庁/奈良県国史・土地区画整理推進事業(建設)	869-1029	藤下 直 菅田 隆	



平成9年度 免振調査位置図 (1/50,000)

I 平城京跡の調査

1 柏木遺跡・平城京左京五条一坊十六坪の調査 第338・370次

I はじめに

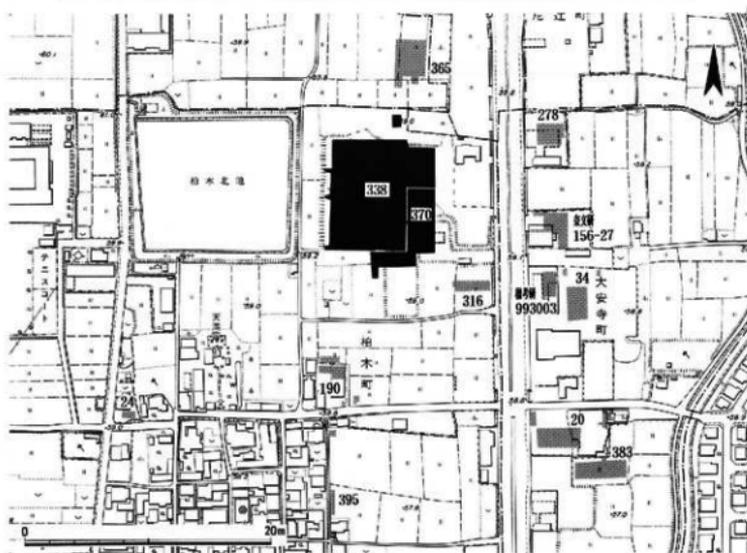
本調査は事務所ビル建設に伴って実施した発掘調査である。事業面積は2万㎡余りの広範なものであり、このうちビル建設予定地の7,926㎡を発掘調査した。調査は建物計画と事業主の変更のため2回に分けて行った結果、第338次調査区と第370次調査区に分かれた。また第338次調査は調査の都合上東西の2つの発掘調査区に分けて調査した。発掘調査の途中で弥生時代の方形周溝墓群の存在が明らかになったため事業主と協議し、338次調査は期間を延長し、結果発掘調査は平成7～9年度の3年度にわたった。今回これらをまとめて概要を報告する。

発掘区は、十六坪の2/3の面積を占めており、調査の結果十六坪の利用状況がほぼ判明した。十六坪では数時期の変遷が見られるが、一坪利用の時期があり、建物配置、出土遺物等から特殊な性格がうかがえる。また奈良時代の下層から弥生時代の方形周溝墓群が確認された。調査地周辺は従来より弥生時代の遺構、遺物が確認される例が多い地域であったが、今回の調査で墓域が見つかり、今後集落、水田等を含めた遺跡の範囲や全容の解明が期待される。

なお遺構番号については奈良時代以前のものに2桁の番号を、奈良時代以降のものに3桁の番号を付した。

調査一覧表

次数	遺構名	調査地	調査期間	調査面積	事業主/事業内容	福祉受付番号	担当者
338A	柏木遺跡・平城京左京五条一坊十六坪	昭和三十五-1区	H07.09.04～H08.07.12	6,326㎡	株式会社エフエフ 株式会社内閣府	H07.3017	橋本 隆雄 主任
370	柏木遺跡・平城京左京五条一坊十六坪	昭和三十五-1区	H08.12.16～H09.05.29	1,600㎡	株式会社エフエフ 株式会社内閣府		大塚 昌雄



発掘区的位置と周辺の調査位置図 (1/4,000)

Ⅱ 検出遺構

発掘区内の基本的な層相は上から盛土、黒色土（作土）、灰色砂質土、茶灰褐色土で、現地地表下約1.2mで弥生時代の遺構面の暗茶灰色土または明黄色砂、灰黄色砂質土となる。奈良時代の遺構面は茶灰褐色土上面であるが、遺構検出は暗茶灰色土上面で行った。弥生時代の遺構面の標高は、北側で58.4m、南側で58.1mである。

検出遺構には、弥生、古墳、奈良、江戸時代のものがある。以下各時期ごとに概要を記す。

弥生時代の遺構 方形周溝墓18基、土器棺墓1基、溝、土坑がある。

方形周溝墓群は南北方向の溝S D01の西側に沿い、幅約20～40mの帯状に分布しており、さらに発掘区外北側と西側に続く。周溝墓群は、S D02をはさみ南北の2群に分かれ、南群が10基、北群が8基ある。いずれの群も周溝墓の主軸は、ほぼ北東から南西方向である。南北の群は、周溝の共有関係等よりさらに数群の単位に分かれるようである。平面規模は、一辺約4～14mで、9号墓と12号墓がそれぞれの群中で最大の平面規模である。

埋葬施設は、2・6・7・10号墓で確認した他は削平されている。2・6・7号墓では、いずれも木棺の小口板の痕跡が残る。それによると、木棺は組合せ式の箱形木棺で、墓壇床面の短辺に小口板を埋め込み、それを支えに側板を立てる形式のものと推測できる。6号墓のものが最も残存状況が良好で、小口板間の距離は約1.6mで、小口板は遺構検出面から約0.4m埋め込む。2・7号墓の小口板間の距離はそれぞれ約1.3m・約1.2mで、小口板を埋め込んだ深さは、いずれも約0.1mと浅い。10号墓では、幅0.5m、長さ1.4mの南北方向の墓壇があるが、深さは約0.05mと浅く、棺の構造は不明である。これら埋葬施設からは、副葬品等は出土していない。



方形周溝墓6号墓全景（東から）

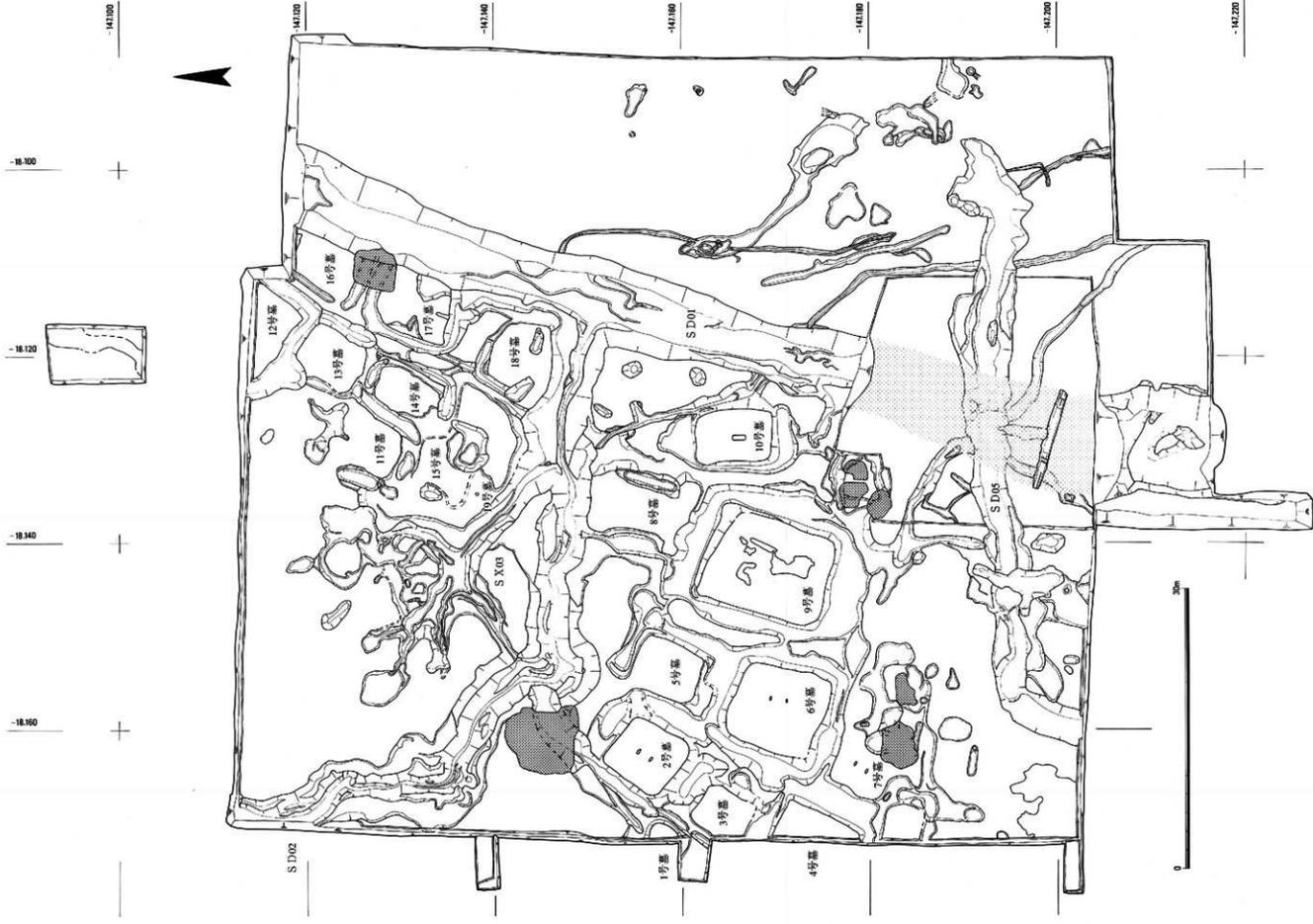


图338式一 新700年遗址平面示意图 (张生编绘 1/400)

土器棺墓19号墓は、15号墓とSX03との間にあり、上半部を削平され下半部のみ残る。胴部最大径70cmの甕を、ほぼ同じ大きさの掘形の中に埋納する。甕内に副葬品はなく、蓋にしていたと思われる高杯の杯部と甕の口縁部片が出土した。高杯は大和Ⅲ様式のものである。

SD01は、幅約6～12m、深さ約2～3mの断面逆台形の溝である。やや西へ振れながら北から南へほぼ直線的に流れ、約110m分を検出した。埋土は大きく3層に分かれ、上から砂層を数層含む黄褐色系の粘土層、木屑・自然木を多く含む暗灰色系の粘土層、弥生土器を含む暗灰色系の砂層となる。中層より上は、徐々に堆積が進んだ結果と考えられ、周溝墓の廃絶後に周辺一帯は森林化が進んだものと考えられる。周溝墓群はSD01の東側には存在しないことから、溝は墓域を区画するものであったと思われる。弥生時代前期・中期の土器が出土した。SD02は、発掘区北西隅から東へ蛇行しながら流れ、SD01へ合流する溝である。幅約6m、深さ約2mで、断面形はV字形である。埋土の状況は、SD01と同様である。SD02の北側には、SD02から八つ手状に溝が枝分かれした遺構SX03がある。枝分かれした溝は、断面漏斗形であり、溝の始まり部分は土坑であったり、急に立ち上がって終わったりする。断面形等から水流によって削られた溝と考えられるが、性格は不明である。埋土の状況はSD01と同様である。

方形周溝墓群の南側とSD01の東側には不整形な土坑が数基あるが、性格は不明である。

方形周溝墓規模一覧表

	東西(m)	南北(m)	高さ(m)	備 考
1号墓	3.0以上	5.0	0.2-0.6	陪墳1か所、周溝は2・3号墓と共有
2号墓	8.2	9.4	0.7-1.1	木棺の小口板の痕跡あり、陪墳4か所、周溝は1・3・5号墓と共有
3号墓	6.8	7.5	0.6-1.1	陪墳3か所、周溝は1・2・4号墓と共有
4号墓	5.5以上	9.5(?)	0.5-0.7	周溝は3号墓と共有
5号墓	6.9	8.7	0.7-0.8	陪墳1か所、周溝は2・6号墓と共有
6号墓	10.5	11.5	0.6-1.2	木棺の小口板の痕跡あり、周溝は5・7号墓と共有
7号墓		7.0	0.3-0.6	木棺の小口板の痕跡あり、東側の陪墳がない、周溝は4・6号墓と共有
8号墓	6.0	11.5(?)	0.8-1.0	陪墳4か所、周溝は9号墓と共有
9号墓	11.0	14.2	0.7-1.0	陪墳1か所、周溝は8号墓と共有、周溝群中平面規模最大
10号墓	7.0	9.0	0.9	墓基1基確認、陪墳1か所
11号墓	6.5	8.0	0.4-0.7	陪墳4か所、周溝は14・15号墓と共有
12号墓	10.0以上	7.0以上	0.5	周溝は13号墓と共有
13号墓	6.0	8.0	0.3-0.5	陪墳2か所、周溝は12・14号墓と共有
14号墓	5.8	8.0	0.6-1.0	陪墳2か所、周溝は11・13号墓と共有
15号墓	7.3	4.0(?)	0.8-0.9	陪墳3か所、周溝は11号墓と共有
16号墓	5.0(?)	7.5	0.4	陪墳1か所
17号墓	7.0(?)	9.0	0.4-0.6	
18号墓	7.5(?)	5.5	0.5-0.8	陪墳1か所



土器棺19号墓(西から)



溝SD01(南から)



第338次調査西桑原区全景(弥生时代遺構面 北から)



第338次調査東桑原区全景(弥生时代遺構面 北から)

古墳時代の遺構 溝が3条ある。

S D04は、重複関係から方形周溝墓群より新しく、S D05より古い。幅約1.0m、深さ約0.2mの浅い溝で、灰色砂で埋まる。出土遺物がほとんどなく、正確な時期は不明である。

S D05は、第370次調査区の中央から始まり、西へ約60mいったところで南へ折れ、発掘区外へ続く。幅約3.0～8.0m、深さ約0.7mで、断面形は浅いU字形である。古墳時代中期の土師器、須恵器が出土した。

奈良時代の遺構 十五・十六坪坪境小路、同南北両側溝、十六坪南限築地塀、同雨落溝、十六坪北限築地塀雨落溝、坪内道路、同東西両側溝、掘立柱建物67棟、掘立柱塀34条、井戸7基、土坑等がある。

条坊関連遺構 S F1516は十五・十六坪坪境小路である。南北両側溝（北側溝S D101・南側溝S D109）を検出した。南北両側溝の心間距離は7.45mで、路面幅は5.9mである。路面は、地山で舗装などの痕跡はなかった。S A201は十六坪の南辺を限る築地塀。十六坪の東西計画心のやや西寄りに門が開く。門は重複関係から4時期ある。北側に幅約1.8mの雨落溝S D105がある。S D106は十六坪の北辺を限る築地塀の雨落溝である。2時期あり、古い方をS D106A、新しい方をS D106Bとした。S A202は十五坪の南辺を限る築地塀。南側に幅約1.0mの雨落溝S D109がある。S F901は南北方向の坪内道路で、両側に側溝がある。道路は2時期あり古い方をS D901A、新しい方をS F901Bとした。S F901Aは幅約2.7mで、東側溝S D111を十六坪の東西計画心に合わせる。西側溝S D110はS D106と直交する。S F901Bは幅約2.7mで、S F901Aの西へ約1mずれた所にあり、やや北で西へ傾く。

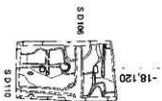
掘立柱建物・塀 建物群は坪中央の南北道路S F901をはさみ東西に分かれる。全体に大型の廂付き建物や、桁行が長大な建物が多い。またS F901上にも建物（S B220・235）があることから、十五坪全体を一体として利用する時期も想定できる。主な建物の概要を記す。

S F901の西半部には、塀（S A260・261・280・266・272）と建物（S B212）で囲まれた東西約27m、南北約70mの区画がある。

この区画の時期をはさんで3時期ほどの重複関係がある。南側では廂付き建物が3棟重複する他、建物・塀が多く重複する。S B230は、桁行7間、梁間3間の東北面の3面に廂をもつ東西棟建物で、東西両側に桁行7間、梁間2間の南北棟建物S B229・234を配し、北側に開くコ字形配置をとる。重複関係からS F901Aより古く、一坪利用の時期のものと考えられる。S B231は桁行5間、梁間4間の南北の面に廂をもつ東西棟建物で、塀で囲まれた区画内にある。S B232は桁行5間、梁間3間の南面に廂をもつ東西棟建物で、柱抜き取り痕跡から文字瓦が多



十六坪遺構概観図 (1/2,000)



-18.180

-18.140

-18.120

-18.100

-147.100

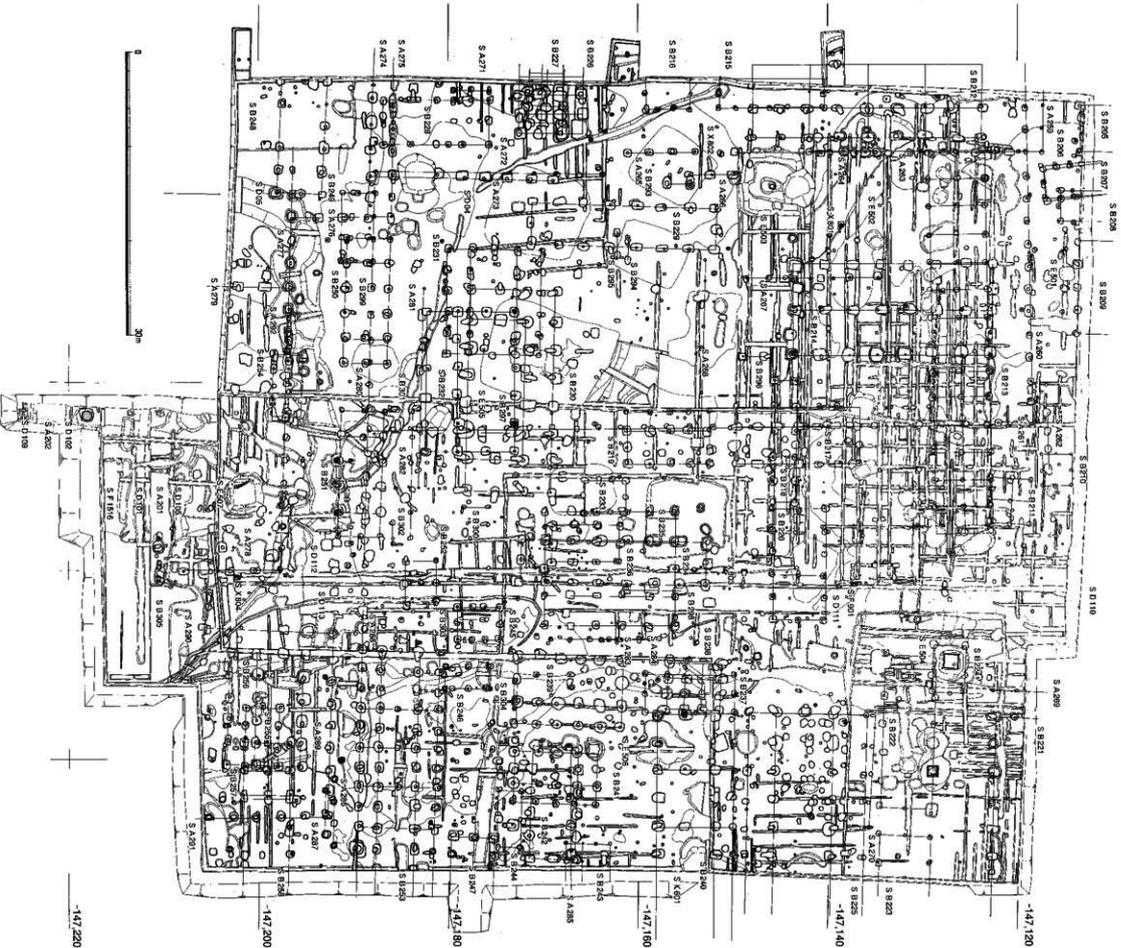
-147.120

-147.140

-147.180

-147.200

-147.220



北京地铁二号线车站平面图 (局部详图) 1:400

く出土した。北側にはS B 212・213・214と長大な建物があるが、南側に比べ遺構密度は低い。S B 212は桁行8間、梁間3間の東に廂をもつ南北棟建物で、間仕切りがある。S B 213は桁行14間、梁間2間の東西棟総柱建物である。S B 214は桁行7間、梁間4間の南北棟建物である。柱配置は特異で、棟木の下の部分にも柱列があり、建物内を柱列で2分する。柱抜き取り痕跡から文字瓦が多く出土した。S B 214とS B 220の間には、桁行5間、梁間1間の細長い建物S B 218があるが、性格は不明である。

S F 901の東半部は長大な東西棟建物が重複せずに南北にならぶ。特にS B 225・240・253は廂をもち、7間以上になると思われる大規模なものである。S B 225は桁行6間以上、梁間4間の南北に廂をもつ東西棟建物で、埋壘の抜き取り痕跡が32基ある。抜き取り痕跡は重複関係から2時期ある。S B 253は桁行12間以上、梁間4間の南北に廂をもつ東西棟建物で、間仕切りがある。南面廂の御柱が西半部のS A 280と柱筋をそろえる。S B 240は桁行6間以上、梁間3間の北に廂をもつ東西棟建物で、間仕切りがある。

井戸 井戸は7基ある。枠が残存するのは3基である。S E 503は枠が抜き取られていたが、掘形底の水溜め部分には一辺約0.45mの井桁組が残る。掘形は平面隅丸方形で、2段になっており、上段は東西約6.3m、南北約7.4m、下段は東西約4.0m、南北約4.0mで、深さは約1.2mである。奈良時代前半の土師器、須恵器と木簡が出土した。S E 504は方形横板組の井戸で、井戸枠の内法は東西、南北ともに約1.5mで、横板7段分(約1.7m分)が残存する。横板は上下を太柄で留める。掘形は平面隅丸方形で、東西約3.6m、南北約3.5mで、深さは約2.0mである。井戸を覆うように掘立柱建物S B 224がある。枠内から奈良時代末から平安時代初頭の土師器、須恵器、軒平瓦6663 B 2点、6801 A 5点、型式不明1点、文字瓦4点(丸瓦「瓦」a種1点、平瓦「矢」b種2点、平瓦「田」a種1点)、紋様埴1点、くるみ、桃の種等が、また掘形からは、墨書瓦1点、木簡1点が出土した。S E 506は方形縦板組隔柱横棧留の井戸で、井戸枠の内法は一辺約1.0mである。底から約0.3m分残存しており、横棧は1段分が残る。掘形は平面隅丸方形で、東西約2.2m、南北約2.0mで、深さは約0.7mである。井戸枠内から奈良時代後半の土師器、須恵器、軒平瓦6663 A 2点、6663 B 1点、型式不明1点、石核、万年通寶1点等が出土した。

溝 溝は、幅約0.4m、深さ約0.1mの東西南北方向の素掘溝で、いわゆる「中世素掘小溝」と同じ形態の溝である。溝は発掘区北西部に多く見られるが、重複関係から奈良時代の建物より古いことがわかる。また溝はS F 901 A上を横切って東へ続くものが少なく、S F 901 Aに規制を受けている。溝は一定間隔で掘られた溝の組合せの群が、4群ほど重なっている。埋土は黄褐色系の粘土で、奈良時代の土器片が少量出土した。発掘区北東・南東部でも掘立柱建物より古い溝が確認できるが、その他は「中世素掘小溝」との峻別が困難である。性格は不明である。



S X 802 (南から)



井戸 S E 504 (南から)

その他の遺構 S X 801は土器埋納坑である。掘形は径0.32mの平面円形で、深さは0.14mである。坑内中央には須恵器の杯蓋を被せた土師器甕が据えられている。甕内には1/3ほど土が入っていたが、内容物はなかった。胞衣壺か地鎮に使用されたものと考えられる。

S X 802は坪の西辺中央付近に位置する土坑である。東西0.65m、南北0.6mの平面ほぼ方形で、深さは0.12mである。土坑内からは、和同開珎が十数点と、さらにその上に東西に並べ置かれた人頭大の河原石2個とその周辺から木炭が出土した。銅銭の残存状況は悪い。S X 803とS X 804はS X 802と同様の遺構で、方形の土坑内に河原石2個を置き、石の周辺に木炭を播く。S X 803は坪の中央付近にあり、東西約0.8m、南北約0.6mで石を東西に並べ、S X 804は坪の南辺中央付近にあり、東西約0.5m、南北約0.6mで石を南北に並べる。S X 804では石の下に銅銭を確認しているが、いずれも遺構ごと切り取って保存しており、石の下の状況は不明である。なおS X 803の上層からは土師器が出土している。土坑内の石の色はS X 802が灰白色系、S X 803が黄土色系、S X 804が赤褐色系である。陰陽五行説に則ったものとする、それぞれ西の白、中心の黄、南の赤に対応し、この地鎮遺構は、坪の中央と東西南北辺に計5個配されたものと考えられる。これらの遺構は十六坪の敷地全体の地鎮に係るものと考えられ、一坪利用の宅地の時期のものと思われる。

十五・十六坪坪境小路・南北向制溝坐標一覧表

遺構	X座標	Y座標	条坊遺構
SF1516	-147,215.825	-18,136.000	十五・十六坪坪境小路 道島心
SD101	-147,212.100	-18,136.000	十五・十六坪坪境小路 北側溝心
SD109	-147,219.550	-18,136.000	十五・十六坪坪境小路 南側溝心



第338次調査西発掘区全景（古墳・奈良時代遺構面 西から）



第338次調査発掘地区全景（古墳・奈良時代遺構西小ら）



第370次調査発掘地区全景（古墳・奈良時代遺構西小ら）

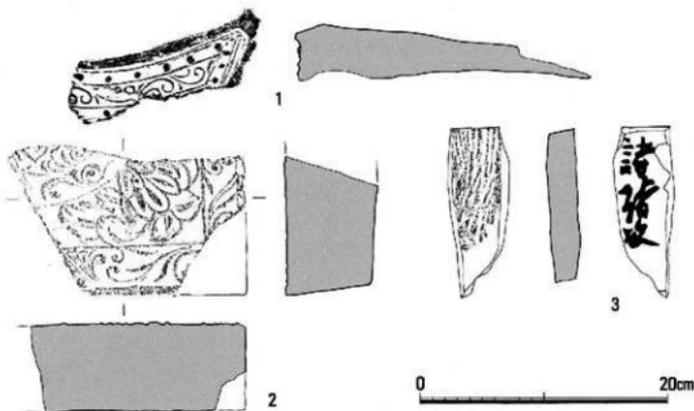
II 出土遺物

瓦類 遺物整理箱で157箱分出土した。大半は丸瓦・平瓦で、整理途中のため主要なものについて記す。軒丸瓦89点、軒平瓦133点、文字瓦33点、鬼瓦3点、埴77点（うち紋様埴1点）、墨書平瓦1点がある。軒丸瓦の内訳は、6133D 1点、6142A 1点、6282G 1点、6282種別不明1点、6308A a 2点、6308A 2点、6308B 4点、6308I 12点、6308種別不明2点、6311A 14点、6311B 11点、6313A 3点、6313B 2点、型式不明33点である。軒平瓦の内訳は、6663A 6点、6663B 15点、6664D 7点、6664F 15点、6666A 18点、6682A 3点、6682C 25点、6685A 1点、6691A 1点、6721G b 2点、6721H 5点、6721種別不明3点、6801A 5点、型式不明24点、新形式1点、平安時代以降2点である。軒平瓦新形式（1）は、右側部分の破片で、4反回転均整唐草紋の右第1、第2、第3、第4単位部分と思われる。唐草第4単位の主葉が界線に接続せずに巻き込み、唐草第4単位右上に一本の遊離した支葉をもつのが特徴である。上下外区及び脇区には珠紋をめぐらす。顎の形は欠損により不明である。平瓦凸面には横位の縄タタキ目があり、凹面は瓦当沿いを横方向にヘラケズりする。文字瓦には、丸瓦に刻印するもの「日奉」(K J 11A) 1点¹⁾、「井」a種3点、「矢」b種3点、「瓦」a種1点、「冬」a種1点が、平瓦に刻印するもの「有」a種2点、「田」a種4点、「終」e種14点、「終」種別不明3点、「里」a種1点がある²⁾。鬼瓦は平城宮Ⅱ式A.3点が出土した³⁾。紋様埴（2）は角の部分の破片で、復元すると一辺約34cmの方形になる。厚さは7.0cmある。紋様は一面のみにあり、范型で作る。墨書瓦（3）は平瓦凹面に「諸諸家」と墨書がある。「家」の字が割れた面に沿って書かれており、瓦が割れてから書かれたことがわかる。調査地内出土の軒瓦で数量的に多いのは、軒丸瓦では6311A（15.7%）、6308I（13.4%）、6311B（12.3%）で、軒平瓦では6682C（18.7%）、6666A（13.5%）、6663B（11.2%）、6664F（11.2%）である。組合せは平城宮・京軒瓦編年のⅡ-1期の瓦が6311A・B-6664Fで、Ⅱ-2期の瓦が6308I-6682Cであろう。

1) 上原真人「天平12-13年の瓦工所」『研究論集Ⅱ』奈良国立文化財研究所 1984

2) 「奈良国立文化財研究所基準資料 V 瓦類5」奈良国立文化財研究所 1977

3) 毛利光俊彦「日本古代の鬼面文鬼瓦-8世紀を中心として」『研究論集Ⅱ』奈良国立文化財研究所 1980



出土瓦類 (1/4)

土器類 弥生・古墳時代のものが遺物整理箱7箱、奈良時代以降のものが36箱出土した。現在遺物整理中のため概要を記す。

弥生土器はほとんどが破片で、全体形がうかがえるものは10個体ほどしかない。また残存状況も悪く、調整が不明なものも多い。

方形周溝墓の周溝出土のものには、広口壺・細頸壺・無頸壺・高杯・鉢があり、大和第Ⅱ・Ⅲ様式のものである。広口壺は3・5・11号墓から出土した。いずれも頸部から肩部にかけて櫛描紋を数条施す。細頸壺は4・5・11号墓から出土した。頸部から肩部にかけて櫛描直線紋または流水紋を施す。甕は15号墓と土器館第19号墓のものがある。15号墓のものはいわゆる大和型の甕で、19号墓のものは口縁部が「く」字状に屈出し、ヨコナアで調整するものである。高杯は19号墓の蓋として使用されており、脚部はすぐ横のSX03から出土した。脚部は中空で、杯部との接合手法は円盤充填法による。

SD01・02からは壺等が少量出土した。大和第Ⅰ様式の土器が何点かあり、方形周溝墓群よりやや古い様相を示す。壺は頸口縁部界と頸胴部界に段をもつもの、貼付け突帯があるものがある。

奈良時代の上器は井戸からまとめて出土している。SE503からは奈良時代前半～中頃を中心とした土師器、須恵器が出土した。土師器には杯・皿などの小型食器類、甕等がある。須恵器には壺、甕類が多くみられる。墨書土器は2点ある。1点は土師器の杯又は皿の底部外面に「下」と書いてあり、もう1点は土師器の皿の口縁部外面に墨書があるが判読できない。その他の井戸、土坑等からは奈良時代末～平安時代初めの上師器、須恵器、黒色土器A類が出土した。土師器、須恵器の器種はSE503とほとんど変わらないが、特に須恵器に壺類が多くみられる。

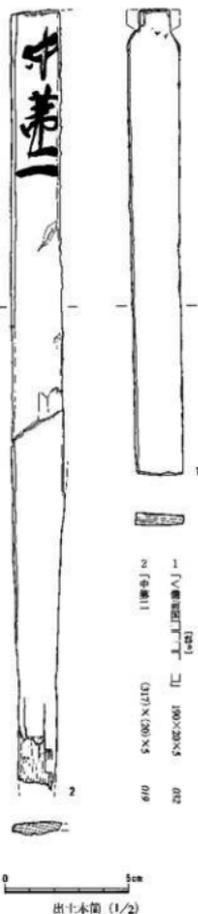
木簡 全部で2点あり、いずれも奈良時代の井戸から出土した。1は荷札である。上端の左右を切り欠く。SE503の井戸枠抜き痕から出土した。2は上部2/3程の右辺と下端が欠損する。下半分は下方に向けて少しずつ削り細めており、下端を尖らせていた可能性がある。付札として使用したものか。SE504の掘形から出土した。

鏡貨 奈良時代のものには和同開珎10数点、萬年通寶1点がある。前者はSX802から、後者はSE506の井戸枠内から出土した。中世以降のものには皇宋通寶、元祐通寶など7点がある。SK601から緋じ紐の一部とともに出土した。

木製品 弥生時代のものには一本鋤1点、組合せ鋤身2点がある。前者は6号墓西側の周濠から、後者は6号墓南側の周濠から2点そろって出土した。奈良時代のものにはSE503から出土した挽物の皿、横櫛などがある。

石器類 石鏃18点、尖頭器、楔形石器、石錐、石匙、スクレイパー、石核（以上安山岩製）、磨石、箴石等がある。弥生時代の方形周溝墓の周溝、溝、土坑、奈良時代の柱穴、井戸等から出土した。いずれも弥生時代のものと考えられる。

(中島和彦 久保清子 山前智敬 原田香織 細川富貴子)



2 南新遺跡・平城京左京四条一坊十三坪の調査 第365次

- 1 事業名 店舗建設
 2 届出者名 株式会社アルベン
 3 調査次数 平城京第365次調査
 4 調査地 奈良市尼辻町432-1・2他
 5 調査期間 平成8年11月5日～平成9年1月9日
 6 調査面積 824㎡
 7 調査担当者 森下浩行



8 調査概要

I 調査の目的

調査地は、平城京の条坊復元では、平城京左京四条一坊十三坪の南辺のほぼ中央に相当する。坪の南辺は、四条大路に向しているため、大路に関する遺構と坪の中央部の様相の解明を目的とした。また、南隣接地では、弥生時代の方形周溝墓群が確認されており(市第338次)、これらの北への広がりも確認も目的とした。そして、弥生時代の遺構の広がりをもとめることができたので、大字名を付し、南新遺跡とした。なお、諸々の事情で、弥生時代の遺構は、一部の深さを確認するにとどめ、保存することになった。

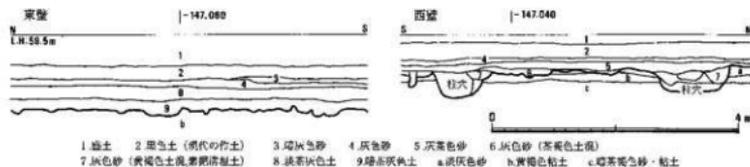
II 調査地の層相

基本的な層序は、上から盛土、近年までの作土、灰色砂、灰茶色砂、淡灰色砂、黄褐色粘土、暗茶褐色砂あるいは粘土と続く。淡灰色砂は西辺の一部にわずかに残っているのみだが、この上面が奈良時代以降の遺構面である(標高58.9m)。弥生時代の遺構面はその下の黄褐色粘土上面が遺構面と思われる(標高58.8m)。全体に削平が著しく、西側3mを残し、約0.1mほどの段差があり、淡灰色砂は失われている。そのため、遺構はすべて黄褐色粘土上面で検出した。また、地形は東にむかってやや下降している。したがって、検出した柱穴は全体に浅く、まとまりを欠く柱穴がある。

III 検出遺構

弥生時代の遺構と奈良時代以降の遺構を検出した。

弥生時代の遺構 方形周溝遺構を9基(SX01～09)検出した。埋葬施設は検出できなかった



1. 盛土 2. 黒土(現代の作土) 3. 厚灰色砂 4. 灰色砂 5. 灰茶色砂 6. 淡灰色砂(茶褐色土層)
 7. 灰色砂(黄褐色土表層部) 8. 淡茶灰色土 9. 暗赤灰色土 a. 淡灰色砂 b. 黄褐色粘土 c. 暗茶褐色砂・粘土

東壁・西壁十層図 (1/80)

が、南隣接地の調査結果からみて、方形周溝墓群と考えられる。ただし、大半が発掘区の中におさまらず、加えて削平されており、規模の明確なものはSX05のみである。そのため、SX05以外については確実性に欠ける。また、SX09は円形を呈する。全体に主軸は北でやや東に振れている。SX05の規模は、遺構検出面で東西7.0m、南北9.0mで、周溝の深さは西で0.3m、東で0.9mで、溝の底では0.6mの比高差がある。したがって、SX05以外についても周溝の底にはかなりの起伏があり、このため浅い部分は削平されたものと思われる。また、これ以外に性格不明の不整形な土坑を2基検出した。

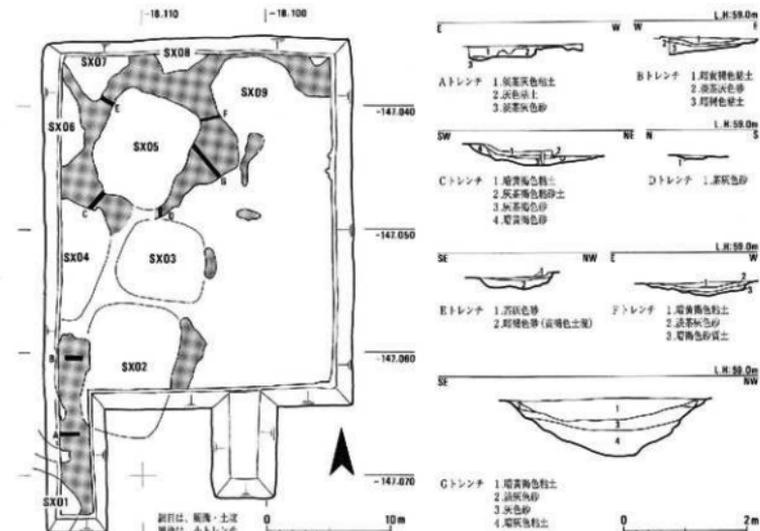
奈良時代以降の遺構 溝1条、掘立柱建物9棟、掘立柱塼6条、方形土坑1、時期不明の溝状土坑群、耕作に伴う溝がある。

SD101 発掘区南端で検出した素掘りの溝。四条大路北側溝とみられる。発掘区西端で途切れる。最大幅4.0m。深さ0.35m。溝心の国土座標は、X=-147,066.620m、Y=-18,102.250m。

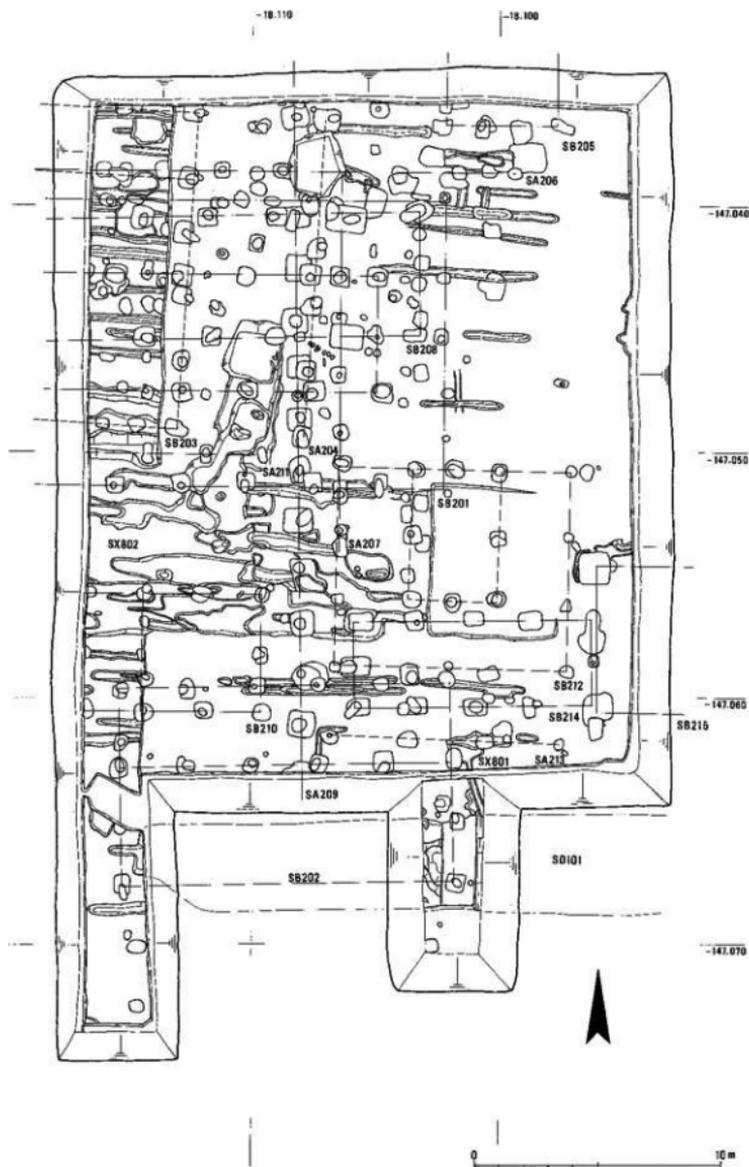
SB201 発掘区北半で検出した東西棟掘立柱建物。桁行4間(10.8m)以上、梁間2間(4.8m)の身舎に四面廂がつく。身舎の柱間は、桁行2.7m等間、梁間2.4m等間。廂の出は、北3.0m、東2.7m、南3.9m。東廂柱列は柱が直線上に並ばない。

SB202 SB201の南で検出した東西棟掘立柱建物。桁行5間(13.5m)、梁間2間(4.8m)の身舎に北廂がつく。柱間は、桁行2.7m等間、梁間2.4m等間。廂の出は3.3m。南北柱筋がSB201とそうることから同時期のものとする。SD101より新しい。

SB203 発掘区の北西隅で検出した南北棟掘立柱建物。東西1間(3.0m)以上、南北5間(12.9m)以上と思われる。柱間は、南北が、南から1、2、5間目が2.7m、3、4間目が2.4m。北1間は間仕切りか廂であろう。



奈良時代遺構平面図 (1/400)・周溝掘立柱土層図 (1/80)



奈良時代以降遺構平面図 (1/200)

S A 204 S B 203の東を画す南北5間 (12.9m) の掘立柱塼。南から4間目の柱は攪乱のため欠く。柱間は南から1、2間目が2.7m、3間目が2.4m。S B 203東側柱列から5.1m離れる。

S B 205 掘立柱建物の南側柱列。東西3間 (4.5m)。柱間は1.5m等間。

S A 206 発掘区北辺で検出した東西7間 (11.8m) の掘立柱塼。柱間は2.4m等間。S B 203より古い。

S A 207 S A 206の南で検出した南北6間 (13.8m) の掘立柱塼。柱間は南から5間が2.4mで、つづいて1.8m。北端はS A 206と接合すると思われる。

S B 208 発掘区北で検出した東西棟掘立柱建物。桁行5間 (10.8m) 以上、梁間2間 (5.1m)。柱間は、桁行が東から2間目が3.0m、ほかは2.7m。梁間が北から、1間目が2.4m、2間目が2.7m。東から3、4間目にそれぞれ間仕切りがある。S B 201より新しい。

S A 209 発掘区中央で検出した南北13間 (27.0m) 以上の掘立柱塼。柱間は、南から9間目が1.8mで、ほかは2.1mである。S B 201、S A 204、S B 208より古い。

S B 210 発掘区南西で検出した東西棟掘立柱建物。桁行3間 (7.2m)、梁間2間 (4.8m)。柱間は桁行、梁間ともに2.4m等間。西から1間目に間仕切り。

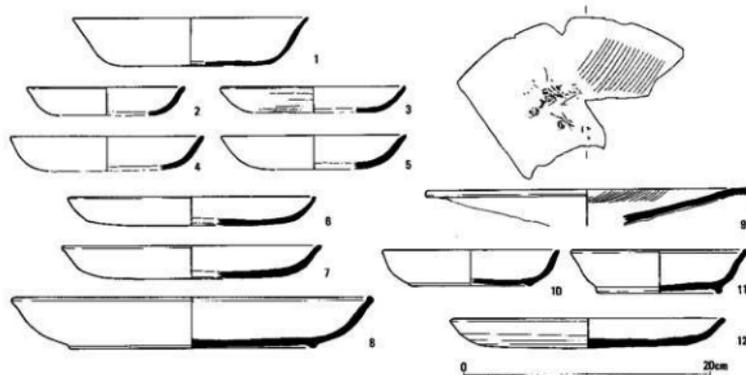
S A 211 S B 210の北を画す東西3間 (7.2m) の掘立柱塼。柱間は2.4m等間。S B 210北側柱列から5.7mの位置にある。

S B 212 発掘区南東で検出した南北棟掘立柱建物。桁行2間 (5.4m)、梁間2間 (3.6m) の身舎に、北を除く三面の廂がつく。身舎の柱間は桁行2.7m等間、梁間1.8m等間。廂の出は、西が3.0m、東が2.7m、南が2.7m。南廂の柱間は西から、1、3間目が3.0m、2間目が3.3mで身舎の柱筋と揃わない。

S A 213 S B 212の南を画す東西3間 (9.3m) の掘立柱塼。柱間は西から1間目が3.3m、2、3間目が3.0m。S B 212南廂からの3.0mの位置にある。

S B 214 S B 210の東で検出した東西棟掘立柱建物。桁行4間 (9.6m)、梁間2間 (3.6m)。柱間は桁行2.4m等間、梁間1.8m等間。

S B 215 発掘区南東隅で検出した南北2間 (6.0m) の掘立柱列。柱間は3.0m等間。掘立柱建物の西側柱列と思われる。



上流S X801出土土器 (1/4)

S X 801 発掘区南東で検出した性格不明の土坑。平面方形土坑の南辺中央に幅0.25mの細溝が取りつく。土坑は東西2.8m、南北1.7mで、深さは東半部が一段深く、0.45mである。溝の幅は0.3m、深さは0.35mである。土坑の埋土は4層あり、溝底は上から2層目の下面に対応する。奈良時代中頃の土器が出土した。重複関係から、S B 202・S A 213より古い。

S X 802 発掘区の中央に広がる溝状の土坑群。粘土探掘坑と思われる。東西方向に掘削している。時期は不明だが、重複関係からみて上記の建物等が廃絶した後である。（森下浩行）

IV 出土遺物

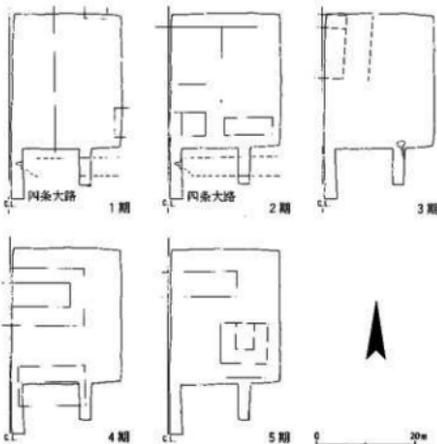
弥生時代と奈良時代の遺物がある。弥生時代の遺物は非常に少なく、土器の破片が数点のみである。奈良時代の遺物は、須恵器・土師器が遺物整理箱10箱分、瓦が10箱分、鉄製品5点、木製品3点がある。遺物包含層から出土したものが多く、遺構に伴うものは少ない。ここでは、四条大路の北側溝を横切る溝を付したS X 801出土土器についてのべる。

S X 801から出土した土器には、土師器（1～11）では杯A（1）・B（10・11）・C、皿A（2～7）・B（8）・C、杯皿蓋、高杯（9）、甕がある。摩滅や内外面の剥落が激しいものが多く、調整手法については不明なものがほとんどである。高杯には墨書がある。杯部の内面に「鏡」の文字がいくつか記されており、習書したものであろう。須恵器では皿A（12）、杯皿蓋、甕Cが出土している。皿Aは底部外面をロクロケズリしている。杯皿蓋は笠形のもののみで、縁部が屈曲しないタイプである。時期的には南都I期古段階の土器がほとんどで、中段階に位置付けられるものが若干出土している。

なお、瓦の大半は丸瓦・平瓦であるが、軒瓦が4点ある。その型式の内訳は、軒丸瓦6143A 1点、6304G 1点、軒平瓦6721H 1点、6721H b 1点である。（池田裕英・山前智敬）

V まとめ

弥生時代の方形周溝墓群は、南隣接地の柏木遺跡からつづくものと考えられ、これらについては、あわせて柏木・南新遺跡と考えるべきであろう。



奈良時代遺構変遷図 (1/1,000)

出土遺物が非常に少なく、時期の判断の材料がないが、柏木遺跡では中期と考えられている。

平城京の遺構については、少なくとも1～5期に区分できる。平城京第338次の調査結果から、発掘区の西辺が敷地のほぼ中心軸になると推定されるが、四条大路北側溝がその部分で途切れること、閉塞施設がなく、建物が西方へつづくことから、長期にわたって1町以上の敷地として利用されていた可能性がある。また、3～5期では四条大路北側溝が廃絶されていることから、大路に限定されない敷地の利用がみとめられる。（森下浩行）



発掘区全景（南から）



発掘区全景（北から）



発掘区南柱張部（南から）

3 平城京左京三条一坊十一・十四坪坪境小路の調査 第366次

1 事業名	事務所ビル建設
2 届出者名	株式会社ケイ・エム・ケイ
3 調査回数	平城京第366次調査
4 調査地	奈良市三条大路二丁目536-1
5 調査期間	平成8年11月28日～12月12日
6 調査面積	100m ²
7 調査担当者	山前智敬



発掘区位置図 (1/6,000)

8 調査概要

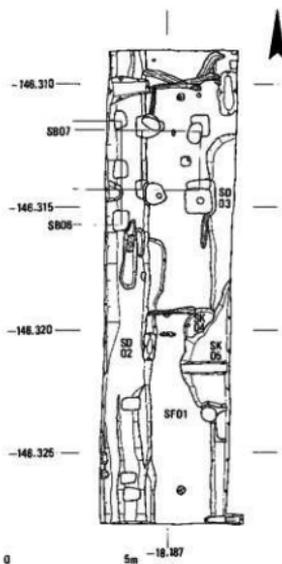
調査地は、平城京の条坊復元では、左京三条一坊十一坪と十四坪の坪境小路に相当する。調査地のすぐ東の十四坪内において奈良国立文化財研究所第46次調査（以下、国第46次調査と略す）が行われており、掘立柱建物24棟、坪西面の築地塀と、これに取りつく掘立柱の棟門1棟、塀5条、池、また調査区の西よりで十一・十四坪坪境小路の東端と、同東側溝（幅1.5m）を検出している¹⁾。棟門が坪の南端から3/10付近にあること、池が南にのびると考えられることから十三坪との間には小路がなく2坪一体の占地であった可能性が示唆されている。今回の調査では十一・十四坪坪境小路の確認を目的とした。

発掘区の基本的な層相は、盛土、黒色土、黄灰色粘質土と続き、現地表下約0.9mで、明灰色シルトまたは明黄灰色シルトの地山に至る。地山上面の標高は概ね62.0mである。

検出した遺構には、奈良時代の十一・十四坪坪境小路（SF01）、同西側溝（SD02）、掘立柱建物2棟（SB06・07）土坑2（SK04・05）、索掘溝（SD03）などがある。遺構はすべて地山上面で検出した。

SF01 十一・十四坪坪境小路である。幅約3m分を確認した。国第46次調査で検出している東肩の数値からすると路面幅は約4.7mとなる。路向には舗装などの痕跡はみられない。

SD02 十一・十四坪坪境小路西側溝である。幅2.2m、深さ0.4m、長さ20m分を確認した。埋土から奈良時代中～後半にかけての土師器、須恵器、漆が付着した須恵器、丸瓦、平瓦、軒丸瓦6282H aが出土した。



遺構平面図 (1/200)

SD03 南北方向の表掘りの溝。東肩が発掘区外にあるため幅員は不明であるが、幅1.1m以上、深さ0.4m以上、長さ20m分を確認した。

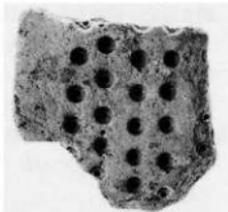
SK04 平面隅丸方形の土坑。東西1.0m以上、南北1.0m以上、深さ0.1m。重複関係からSD03より新しく、SK05よりも古い。

SK05 平面不整形の土坑。東西2.0m以上、南北5.0m以上で、東側は発掘区外に続く。深さ0.5m。

SB06 南北2間（4.2m）、東西1間以上の掘立柱建物。重複関係からSD02より新しい。

SB07 南北1間（2.4m）、東西1間（2.4m）以上の掘立柱建物。重複関係からSD02・03よりも新しい。なお柱穴埋土からガラス小玉鑄型（写真）、漆が付着した土師器、須恵器が出土した。

今回の調査においては、当初の目的どおり十一・十四坪坪境小路および西側溝を検出することができた。十一・十四坪坪境小路側溝溝心間距離は6.58mである。この数値は大尺・小尺ともに完好的な数値とならない。西側溝心の国土座標は $X = -146,326.00$ 、 $Y = -18,188.58$ 、道路心は $X = -146,326.00$ 、 $Y = -18,185.29$ 、東側溝心は $X = -146,342.00$ 、 $Y = -18,182.00$ である。平城京左京三条一坊十一・十四坪坪境小路を検出したことで、当初十一・十四坪は坪境小路によってわかれていたが、その後、坪境小路が廃され、掘立柱建物SB06・07が小路の位置に建てられている。したがって、少なくとも十一・十四坪を含めた二坪以上を一括利用した宅地であったことが判明した。（山前智敬）



SB07出土ガラス小玉鑄型（1/1）

- 1) 奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所年報 1968」1968
奈良国立文化財研究所「平城京左京三条一坊十四坪発掘調査概報」1995



発掘区全景（南から）

4 平城京左京五条六坊十一坪の調査 第368次

- 1 事業名 共同住宅建設
 2 届出者名 株式会社富士ビル
 3 調査回数 平城京第368次調査
 4 調査地 奈良市西木辻町字綿町250-1他
 5 調査期間 平成8年12月2日～12月25日
 6 調査面積 110m²
 7 調査担当者 細川富貴子



発掘区位置図 (1/6,000)

8 調査概要

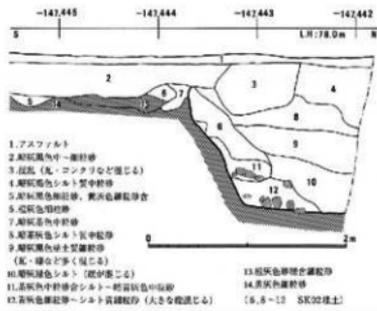
調査地は、平城京の条坊復元では、左京五条六坊十一坪の南東部にあたる。この坪は、五、六、十二、十三坪とともに佐伯院に推定されている。周辺での調査は少ないため、調査は遺構の残存状況の把握を目的として実施した。

調査地の層相は、上からアスファルト (0.2~0.4m)、暗灰黒色中粒砂 (攪乱層, 0.1~0.4m)、暗灰褐色シルト質中～細粒砂 (0.2~0.5m) とつづき、現地表面から0.5~0.8mで黄灰色細粒砂～橙灰色砂礫の地山に至る。遺構の検出もこの地山上面で行った。地山上面の標高は概ね77.4mである。

検出遺構には、中～近世の井戸1基、土坑1、埋甕遺構5、埋桶遺構1、素掘溝、柱穴がある。以下、主なものについて述べる。

SE01 発掘区東部で検出した井戸である。平面が東西1.8m、南北1.6mの不整形の掘形だが、北側が少し攪乱に壊されている。検出面からの深さは、約1.7mである。井戸枠は残存しなかったが、掘形から人頭大の石が多く出土したので、石組の井戸であった可能性がある。掘形から、土師器皿・釜、瓦質土器鐮、国産陶器碗などが出土している。16世紀末～17世紀初頭のものと思われる。

SK02 発掘区北西隅で検出した土坑である。発掘区内では、東西8.0m、南北1.2~1.8mを検出した。発掘区外の北と西へ続き、全形は平面方形の大きな土坑になると思われる。検出面からの深さは、約1.0mである。じん芥処理用のための土坑であつたらしく、土師器皿・炮烙、瓦質土器鉢、国産磁器染付碗、国産陶器鐮鉢・急須などの土器類、鶴の羽巾などの土製品、下駄などの木製品が出土した。18世紀後半～19世紀のものである。土坑掘形の南西壁に拳大の礫が集中する部分があるが、発掘区西壁の



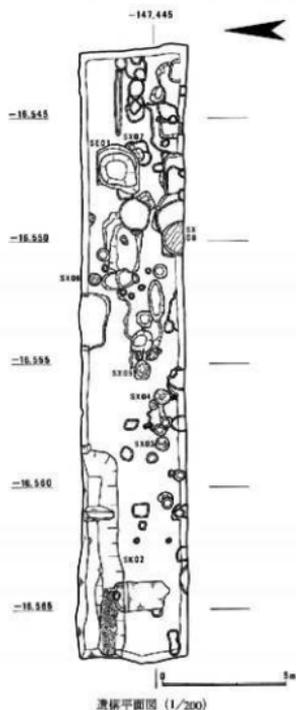
西壁土層図 (1/50)

断面で観察すると、石を組んでいる様子ではなく埋土の中に石が多めに混じっている状態であった。この石の混じる土の中からは、遺物は出土しておらず、石だけがまとめて投棄されたようである。

S X03~08 S X03~07は埋壘遺構である。S X03・05・07は瓦質土器、04・06は国産陶器である。壘内から土師器皿・釜、瓦質土器鉢、国産陶器鉢などが出土している。土師器皿にはススの痕跡が残るものも多く、そのなかには、口径6.5cm前後の小皿もある。16世紀末~17世紀初頭のものと思われる。S X08は埋桶遺構である。発掘区内で北半分を検出した。東西2.5mの掘形の西寄りに直径1.2mの桶を据えている。桶の側板はほとんど残っておらず、底板も薄く脆弱な状態であった。遺物は桶内から、土師器皿・釜、瓦質土器鉢、瓦器碗、掘形から木製品が出土した。土師器皿には口径12.0cm程度の浅い皿と、口径7.0~8.0cmの小皿の2種類が見られ、ススの痕跡が残るものもある。国産陶器類は出土しておらず、15世紀末~16世紀前半のものと思われる。

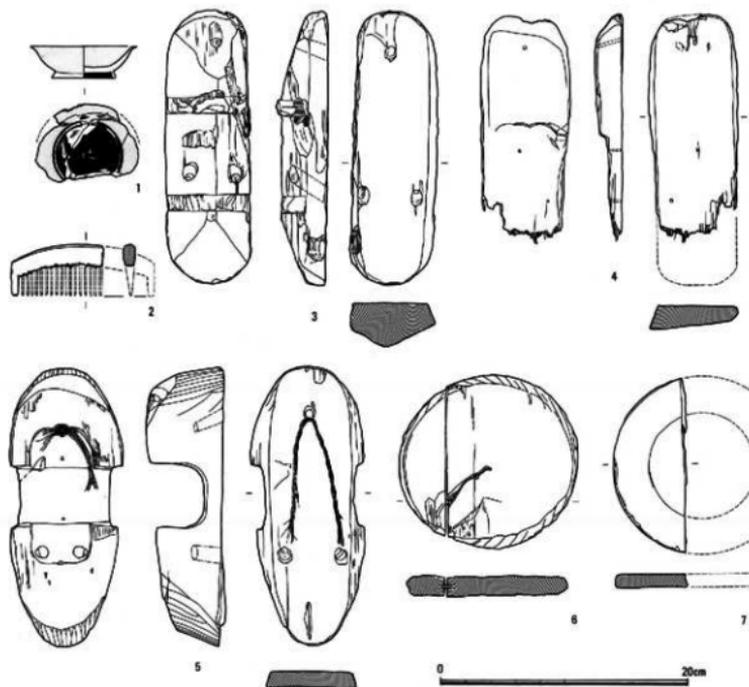
柱穴をいくつか検出しているが、建物としてまとまらず、遺物も少量で時期は不明である。

遺物は、遺物整理箱で15箱分出土した。土器類は前述したように、15世紀末~19世紀のものが出土している。瓦類には軒瓦、棧瓦、丸・平瓦がある。木製品も出土しており、残存状態が比較的良好的なものについて以下に図示し報告する。1はS X08、2~7はS K02から出土した。1は小型の挽物皿である。高台がつき口縁部は外反する。底面、高台内面は黒漆を塗り、それ以外の



部分は赤色系漆を塗る。底部中央には赤色系漆で「社」と書いている。同一個体と思われる破片で外面に黒漆で植物の絵を絵付けしているものも出土している。横木取り、柁目材使用。口径8.6cm、器高2.6cm。2は横節である。長方形で肩部に丸みを持つAⅡ型式である。歯は欠損しているが根元の数から3cmあたり約8本で粗く、解構であると思われる。現存幅7.4cm、高さ2.2cm、厚さ1cm。3～5は下駄である。3は差歯下駄である。鼻緒孔の位置、歯の作り方、平面形からBⅡb型式に分類できる。歯は欠損し根元に一部残存している。長さ22.2cm、幅6.8cm、厚さ3.7cm。右足用である。4はCⅡa型式。歯が台と一体となっている非独立性の連歯下駄である。鼻緒孔部分と台中央には鉄製の金具が残存しており、鼻緒を金具で留めるタイプであると思われるが、中央の金具は用途不明である。現存長18.2cm、幅6.3cm、厚さ2.2cm。5はぼっくりである。踵の左寄り部分で2cmほど擦り減っている。長さ22.6cm、幅9.1cm、厚さ6.2cm。右足用と考えられる。6・7は円盤状木製品である。6は同一部材を楔で接合しており、割れの補修と思われる。周縁は両面から外に向かって削り出している。直径14.1cm、厚さ1.5cm。7は周縁と同心円の線刻がある。桶の底の可能性がある。復元径14.5cm、厚さ1.1cm。

今回の調査で検出したS K02は、周辺に近世の遺跡が存在する可能性を示すと思われる。今後の調査の増加が待たれる。
(細川富貴子 久保邦江)



S X08・S K02出土木製品 (1/4)

5 芝辻遺跡・平城京左京三条三坊三坪の調査 第375次

- | | |
|---------|----------------|
| 1 事業名 | 店舗建設 |
| 2 届出者名 | 大和工商リース株式会社 |
| 3 調査回数 | 平城京第375次調査 |
| 4 調査地 | 奈良市大宮町531-7他 |
| 5 調査期間 | 平成9年4月7日～6月13日 |
| 6 調査面積 | 336㎡ |
| 7 調査担当者 | 森下浩行 原田憲二郎 |



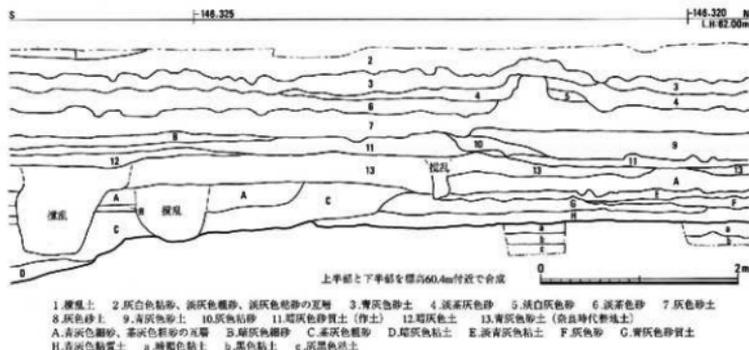
8 調査概要

I 調査の目的

調査地は、平城京の条坊復元では平城京左京三条三坊三坪に相当する。同坪内では、西隣接地で、平成4年度に発掘調査が実施されており、弥生時代の溝、奈良時代の掘立柱建物、中・近世の河川が検出されている（市第247次、『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成4年度』1993所収）。この坪の中央には南流する佐保川が想定されており、現在でも想定された場所と同じところを流れている。調査地は、佐保川の西側で、坪の北西部にあたり、調査地のすぐ北側には三条条間路、第247次発掘区の西辺には東二坊大路が想定される。これらのことから、三坪北西部の様相や当時の佐保川との関係に加えて、隣接地で検出された弥生時代、中・近世の遺跡の解明も調査の目的とした。なお、今回の調査で新知見があり、遺構の解釈に若干変更があったことから、遺構番号を整理した。したがって、検出遺構の項では第247次調査を含めて報告する。

II 調査地の層相

層序は、地表面から約4mまでは、土止め支保工を設けたため不明である。それ以下、砂と砂



西壁土層図 (1/30)

土の互層（約1m）があり、暗灰色の耕作土（約0.1m）、茶灰色砂質土（0.1～0.2m）、青灰色砂土、灰色砂と粘土の互層（0.2～0.3m）、青灰色砂質土、暗褐色粘土となる。茶灰色砂質土と青灰色砂土は奈良時代の整地土で、弥生時代の河川がある南半部では青灰色砂土がより深く堆積し、厚さ0.4mになるところがある。茶灰色砂質土上面が奈良時代の遺構面である（標高60.6～60.7m）。青灰色砂質土上面（標高60.3m）と暗褐色粘土上面（標高60.1m）とが弥生時代の遺構面であり、その上の砂と粘土の互層は河川の氾濫による堆積である。

Ⅲ 検出遺構

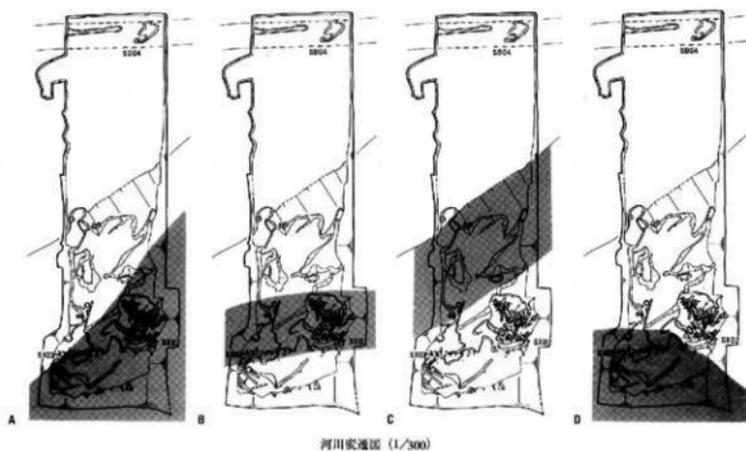
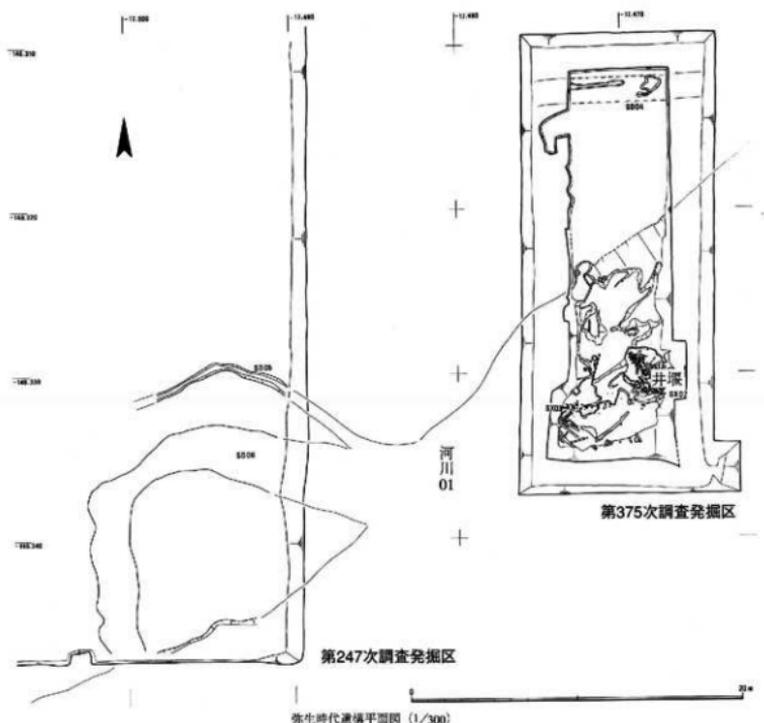
弥生時代と奈良時代の遺構のほか、中・近世の河川、中・近世以降の耕作に伴う素掘りの溝がある。

弥生時代の遺構 河川とそれに伴う溝・井堰がある。

河川01 発掘区南半で検出した河川。大きくみて北東から南西方向に流れる。堆積上層の観察から少なくとも4回流路が変わっている。流路を古い順にA・B・C・Dと表わす。Aは、右岸はC・Dによって削られ、左岸は発掘区外のため、幅は不明であるが、川底の形状と土層によって、右岸の位置はほぼ想定できる。深さ1.2m。北東から南西に流れており、流れと直交して後述する井堰S X02が造られている。Bも両岸がC・Dによって削られているため、正確な幅は不明であるが、土層と後述する杭列S X03によって、およそ3.5mと推定できる。深さは1.2mである。ほぼ東から西へ流れている。Cは、両岸ともに残っており、幅5m、深さ1.0mである。北東から南西方向へ流れている。埴土は青灰色砂質土の上面を覆う。Dは、左岸が発掘区外となるため、幅は不明。深さ1.2m。なお、土器、石器とともに流された井堰の部材のほか、多くの植物遺体（種子・葉）が出土した。

S X02 河川01Aの時期に設けられた井堰。B以降の流路で大半が流されているが、右岸付近の一部が残存する。4回の改築がみとめられる。古い順にA・B・C・Dと表わす。Aは、そのまま南西に倒れていたが、B以降の井堰に内包されて残存状態は良好である。構造を復元すると、川床に斜杭を上流側（丸木を縦に4分割した材）からと下流側（直径9cmの丸木材）からの2方向にX字状に打ち込み、その交差部の上に横木（直径9cmの丸木材）を架ける。さらに横木の下流側にほぼ垂直方向に杭（10cm×5cmの角材）を打ち込んで、横木を安定させる。ついで、交差部の上流側に横木（直径9cmの丸木材）をあて、ほぼ垂直に杭（直径11cmの丸木材）を打ち込み、横木の流出を防ぐ。さらに同様にほぼ垂直に矢板（幅7～14cm）を隙間なく打ち込む。Bは、やや倒れ気味に残存していた。下流側から0.1～0.3m間隔で、斜めに杭（直径あるいは幅5～10cm）を打ち込み、直径1～2cmの小枝を斜格子状に置いて隙間を塞いでいる。ついで、その上に横木をあて、上流側から右岸に斜めに杭を打ち込み、横木の流出を防ぐ。Cは、残存部分は少ないが、倒れたBを裏込めとして、幅8～13cmの矢板を隙間なく打ち込んでいるようである。矢板下端の高さからみて、A・Bと比べて川底が少しあがっているものと思われる。なお、Cの前には角材が10本足らず倒れていた。Dは、さらに残存部分が少なく、詳細は不明だが、0.15～0.20m間隔で杭（直径4～6cmの丸木材）が打たれている。隙間を何かで塞いでいたはずであるが、流されたものと思われる。また、裏込めあるいは支える材が必要であるが、倒れたCが直接裏込めになっておらず、砂礫が堆積している。杭下端の高さからみてもかなり川底があがった状態が窺える。

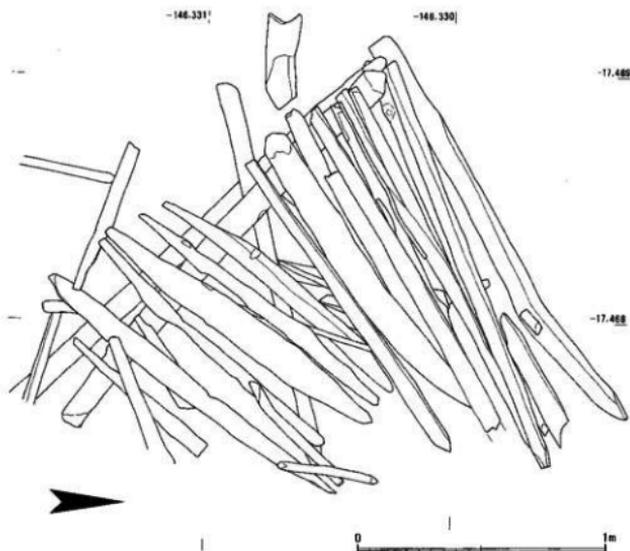
S X03 河川01Bに伴う護岸の杭・矢板列。左岸には密に打たれているが、右岸には数本が残っている。右岸については河川01Cによって流された可能性もある。



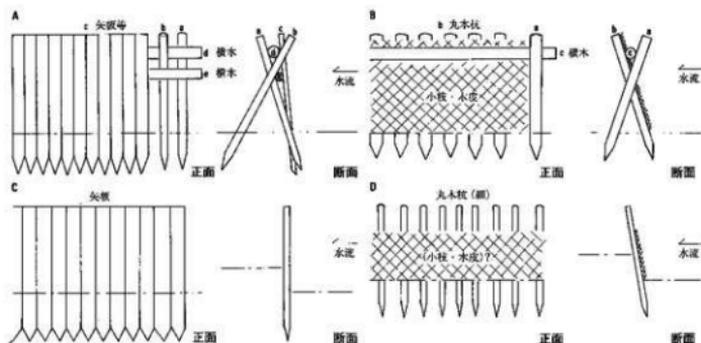
S D 04 発掘区北で検出した東西方向の溝。青灰色砂質土上面で検出した。幅1.6m、深さ0.25m。発掘区外北東で河川01とつながるものと思われる。

S D 05 旧番号 S D 01。中・近世の河川で破壊されているが、東で河川01とつながるものと思われる。

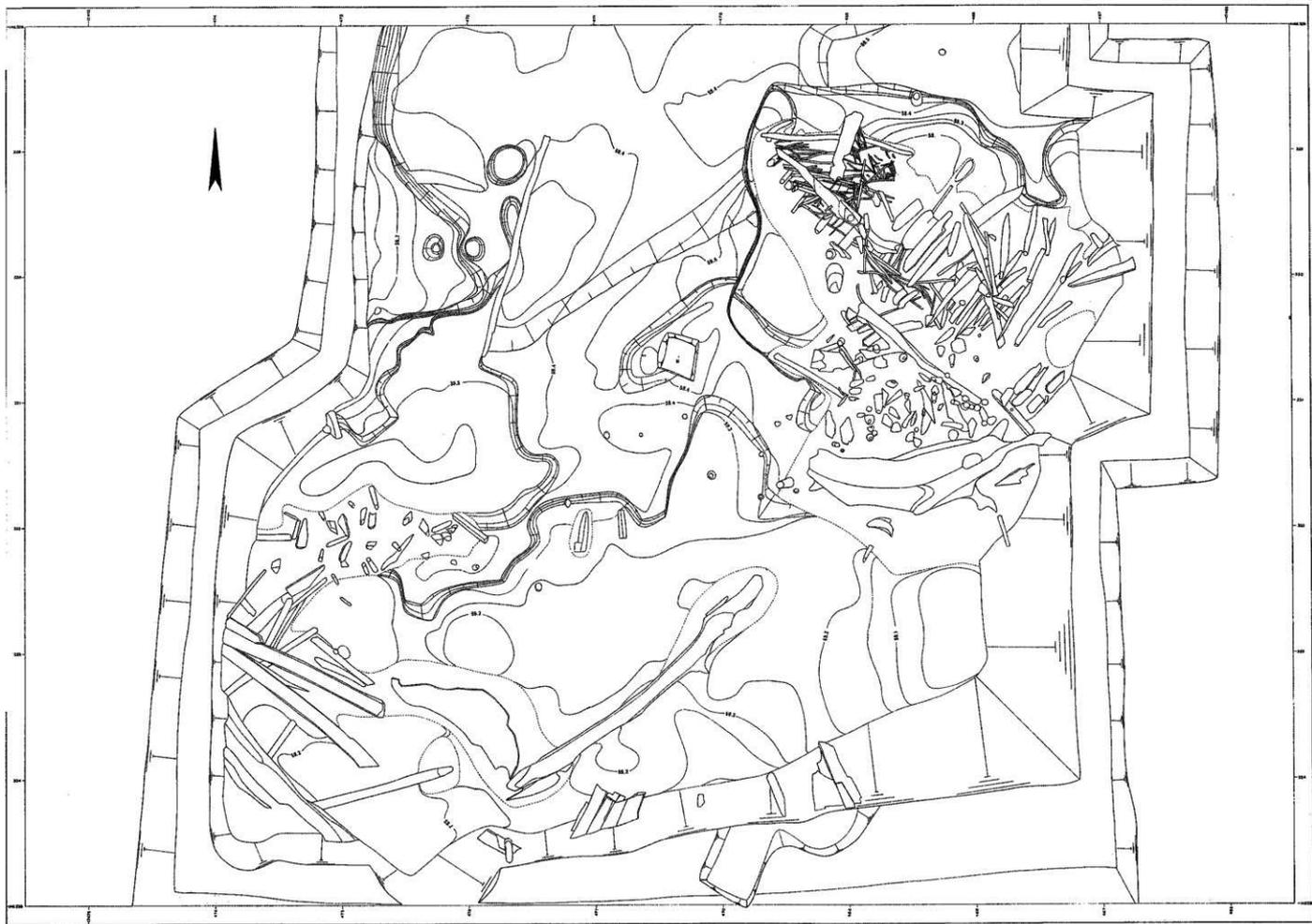
S D 06 第247次調査で検出した溝。L字状に屈曲する。幅2.4~3.3m。埋土は灰色砂。S D 05と同様に中・近世の河川で破壊されているが、東で河川01とつながるものと思われる。あるいは河川01の一流路かもしれない。



井堰 S X 02 A 平面図 (1/20)



井堰尖頭模式図 (総尺不同)



井欄S×02、杭・尖版列S×03

奈良時代の遺構 第247次調査分を合わせて、掘立柱建物8棟、掘立柱塼6条、井戸1基、土坑4基がある。SB02をSB201、SB03をSB202、SB05をSB207、SB06をSB208、SK08をSK601、SK09をSK602、SK10をSK603、SE11をSE501に変更した。その他については以下に報告する。

SA203 第247次発掘区の北端で検出した南北2間(5.4m)以上の掘立柱塼。柱間は2.7m等間。さらに北につづくものと思われる。重複関係からSB201より古い。

SA204 SA203南端から5.7m離れた南北6間(16.5m)の掘立柱塼。柱筋はSA203と揃う。柱間は南端1間が3.0m、ほかは2.7m。重複関係からSB202より新しく、SE501より古い。

SA205 SA204の中央から東へのびる東西1間(3.0m)以上の掘立柱塼。

SA206 SA204から5.7m離れた南北3間(5.4m)の掘立柱塼。柱筋はSA203・204と揃う。柱間は2.7m等間。さらに南につづくものと思われる。

SA209 SB202と重複して検出した南北4間(8.8m)の掘立柱塼。柱間は2.2m等間。柱掘形は丸く、柱列が直線にならない。重複関係からSB202より新しい。

SB210 第375次発掘区中央で東西棟掘立柱建物の西半部を検出した。身舎は、桁行2間(6.0m)以上、梁間2間(4.8m)で、北と南に廂が付く。柱間は、桁行3.0m等間、梁間2.4m等間。廂の出は、北、南ともに2.1mである。

SB211 SB18の南で掘立柱建物の北西隅を検出した。南北1間(3.0m)以上、東西2間(6.0m)以上。柱間は東西3.0m等間。西側柱列がSB18の西側柱列と揃うことから、東西棟建物の北廂である可能性が高い。

SB212 第375次発掘区西端で検出した掘立柱列。南北棟建物の東側柱列と思われる。桁行4間(10.8m)以上。柱間は2.7m等間。

SB213 第375次発掘区中央で検出した南北棟掘立柱建物。桁行4間(10.2m)、梁間2間(5.4m)。柱間は、桁行の中央2間が2.4m、両端がともに2.7m。梁間は2.7m等間。重複関係からみてSB18より新しい。

SA214 第375次発掘区南半で検出した南北5間(11.3m)の掘立柱塼。柱間は、北から1間目が2.3m、2間目が2.6m、3、5間目が2.2m、4間目が2.0m。柱掘形は丸く、小さい。

SK604 第375次発掘区中央で検出した平向方形土坑。東西、南北ともに1.6m、深さ0.6m。

SX805 第375次発掘区北東で須恵器壺Qが正位置で出土した。整地土を削った状態で検出したため、遺構は不明だが、おそらく土坑に埋納されたものと思われる。壺内には、10cm角の石が入っていた。

なお、第247次発掘区の西辺に、東二坊大路の東側溝が想定されるが、中・近世の河川によって削られたものと思われる。

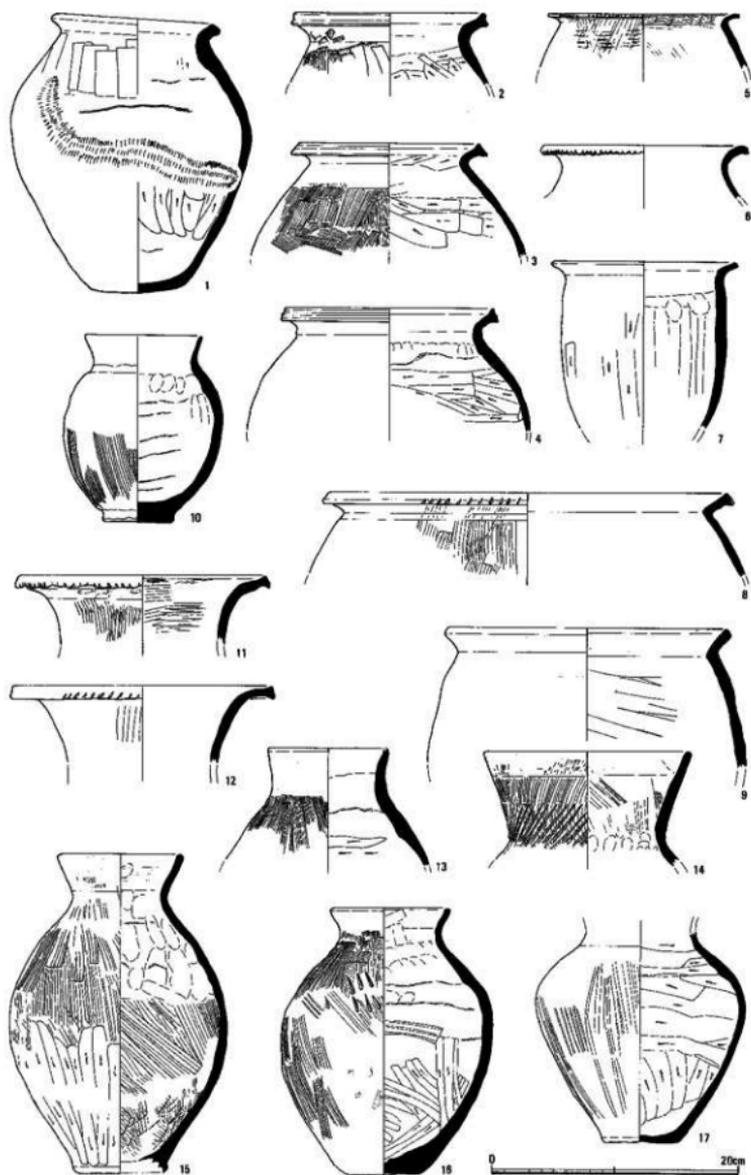
中・近世の遺構 河川2条(河川801・802)、それに伴う土堤1条、杭列がある。SX12をSX803、SX13をSX804に変更した。(森下浩行)

IV 出土遺物

縄紋時代の土器、弥生時代の土器・石包丁・木製品(杵・杭・矢筈等)、奈良時代の土器・瓦がある。

弥生時代の遺物 土器は遺物整理箱4箱分、石包丁2点、木杵1点、井堰の部材及び木杭約270点が出土した。そのうち大半は河川01出土の上器であり、その一部を報告する。

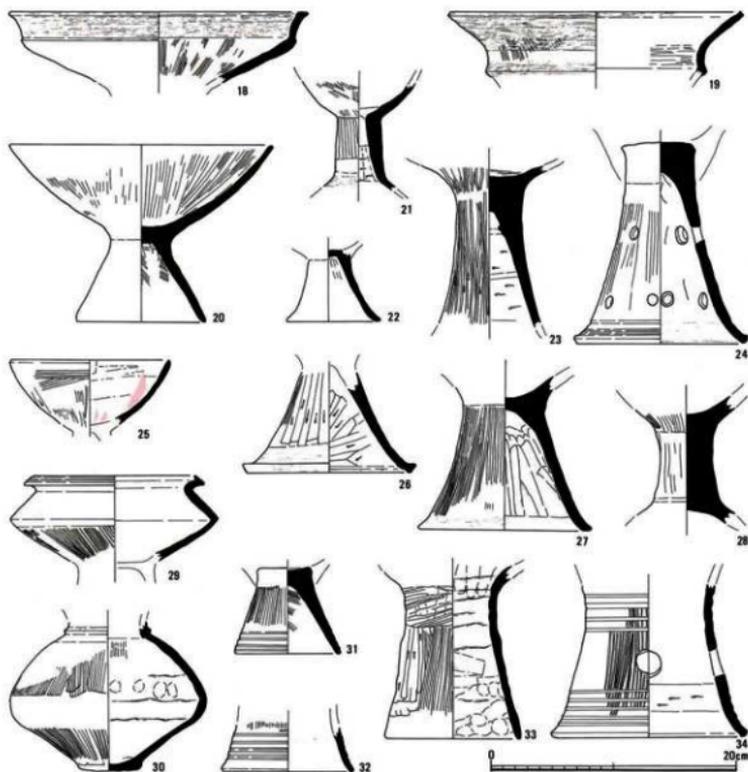
甕形土器(1～9) 口径は12.3～32.2cm。器高は、1が22.5cmである。口縁部は短く、外傾、



河川町出土土器 (1/4)

あるいは外反する。端部は上下に広がるもの（2～4）とそのまもの（1・5～7）とがある。擬凹線、刻み目がみられるものがある。7は寸胴形で、最大径が口縁部にあるが、それ以外は、体部中央、あるいはやや上部がふくらむ。調整は、体部外面がハケ、内面がケズリ、口縁部は内外面ともヨコナデである。1の体部中央外面には絵画がみられる。爪の圧痕を三列に並べて、虫あるいは爬虫類を表現したものと思われる。一条の横線が描かれ、地平線から首を出しているようにも見える。

壺形土器（10～17・30） 口縁部は外傾し、端部でさらに外傾するもの（11・12）と外傾し、そのまま丸くおさまるもの（10・13～16）とがある。前者は口縁部のみ残る。端部は上下に広がり、下端に刻み目がみられる。口径は20cm前後。後者は口径9.4～16.4cm、器高は15.2～25.8cmで、10はやや小形、14はやや大形である。14は頸部にハケ状工具の小口で刻んだ紋様がある。調整は、口縁部はいずれも内外面ともにヨコナデであるが、体部は15が、外面上半部がハケ、下半部がケズリ、内面上半部がナデ、下半部がハケである。16は外面ハケ、内面上半部がナデ、



河川101出土土器 (1/4)

下半部がケズリである。17は外面ハケ、内面ケズリである。29は盤整王形の体部に、短い口縁が付く。台付の可能性ある。吉備系か。体部外面上半はヨコナデ、下半はミガキである。30は下ぶくれの体部。体部外面上半はハケ、下半はミガキである。

高杯形土器 (18~28) 全体の形状がわかるのは、20のみで、ほかは杯部、脚部のいずれかを欠く。杯部は、口径21.2~23.9cmの大形品(18~20)と12.8cmの小形品(25)がある。また形態から、碗形のもの(20・21・25)と皿形のもの(18)とがある。19は二重口縁。脚部も径12.6~13.5cmの大形品(24・26・27)と7.6cmの小形品(22)がある。端部で外方に広がるものが多い。24は、上3個、下6個の2段の円孔がみられる。28は中実である。調整は、杯部は、内外面ともにハケ、ミガキ、ナデがある。脚部は外面にミガキ、内面にケズリ、ナデが多い。25は杯部内面に赤彩あり。

脚 (31・32) 径は31が8.2cm、32が10.3cm。いずれも端部近くの外面に数条の擬凹線がみられる。32は端部がわずかに外方へ広がる。

器台形土器 (33・34) ともに脚部のみで、受部を欠く。径は33が10.8cm、34が14.8cm。33は直立気味に開き、端部は丸い。34は端部で外方に広がる。下半部中央に円孔があり、その上下に擬凹線がみられる。調整は、33の外面が受部に近いところで横方向のミガキ、端部で横方向のナデ、その間は縦方向のハケとケズリである。内面はナデ。34は外面がハケ、内面がケズリとナデである。(森下浩行)

奈良時代の遺物 土器は、第247次調査と合わせて遺物整理箱15箱分、瓦は47箱分ある。瓦の大半は丸瓦・平瓦であるが、軒丸瓦9点、軒平瓦3点、埴5点がある。軒丸瓦の内訳は6142A 2点、6281A 1点、6282D 2点、6284E a 1点、6291A 1点、6291種別不明1点、6320A 1点である。軒平瓦の内訳は6663A 2点、6681B 1点である。なお、今回出土した6284E aは運搬に范傷を有するもので、京都府木津町瀬後谷瓦窯出土6284E aの范傷Ⅱ段階のものである¹⁾。本調査と第247次で出土した奈良時代の軒瓦を、出土場所別にまとめたものが別表である。

三坪出土軒瓦は組合せ関係を指摘するには量的に少ない。ただ、軒瓦の大半をSB210、SB211が占めること、また両建物の柱抜き取り穴から出土した瓦類が20箱と、第274・第375次両調査出土瓦類総量の約43%を占めることから、この両建物に瓦が葺かれていた可能性は指摘できよう。

平瓦は一枚作り平瓦が大半だが、SB210の柱抜き取り穴から10点、SB211の柱抜き取り穴から14点の粘土板桶巻き作り平瓦が出土した。SB210とSB211の柱抜き取り穴から出土した平瓦2片が接合した。また、SB211とSB212の柱抜き取り穴から出土した平瓦2片が接合した。

(原山憲二郎)

1) 奥村茂「本邦瓦葺後述の調査に関する一考察—軒瓦の分布から—」『京都府歴史文化財調査報告』第62号 京都府歴史文化財調査センター 1996

第274次・第375次調査出土軒瓦集計表

軒丸瓦	SA204	SB210	SB211	包含層	全体
6142A			2		2
6281A				1	1
6282D			2		2
6284Ea				1	1
6291Aa	1				1
6291A		1			1
6291種別			1		1
6320A		1			1

軒平瓦	SE501	SA206	SB210	包含層	全体
6663A		1	2		3
6663B				1	1
6668A	1				1
6681B			1		1
6681C		1			1

※ SB・SA出土のものはその大半が柱抜き取り穴からの出土

V 調査の結果から

今回の調査で得られた特筆すべき成果は、弥生時代では、井堰の発見、中期末から後期初頭の良好な土器資料、絵画土器の発見である。井堰は、倒れた状態であったが、残存状態がよく、構造を類推できるもので、4回の改築がみられた。良好な土器群からみた井堰の時期は、中期末～後期初頭頃と思われる、かなりの頻度で改築されていることがわかる。その後、河川は3度流路を変え、弥生時代後期あるいは古墳時代初頭に埋まったものと思われる。この井堰の発見によって、近辺での水田耕作がほぼ確実となった。また、絵画土器はモチーフは不明ながら、これまでになかった新資料を付け加えることになった。

また、奈良時代の宅地については、三坪の北西4分の1がほぼ明らかになった。少なくとも次の4回の変遷がうかがえる。

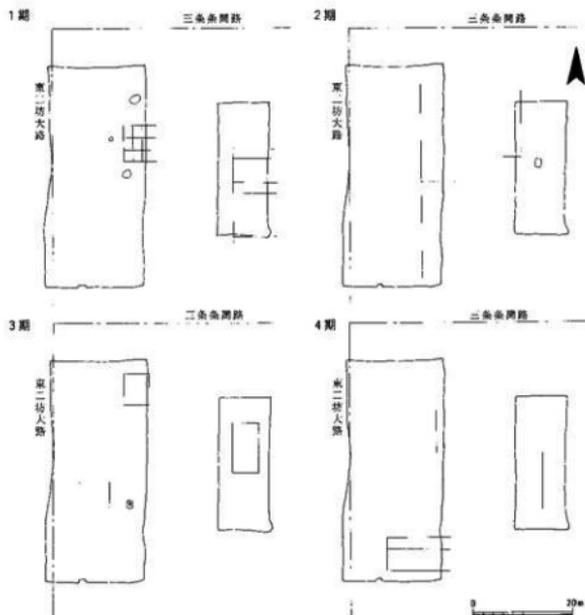
1期 比較的大型の建物が建て並ぶ時期。土器、瓦の型式からみて、8世紀前半と思われる。(SB202、SB210、SB211、SK601～603)

2期 坪西辺近くに閉塞施設、あるいは区画施設がある時期。坪内が区画施設によって細分された可能性がある。(SA203～206、SB212、SK604)

3期 建物が分散する時期。東二坊大路の想定位置と建物の関係からからみて、この時期に東側溝は埋まっている可能性がある。(SB201、SB207、SB213、SE501)

4期 柱掘形が丸く、小さく、柱列が直線にならない建物の時期。(SB208、SA209、SA214)

(森下浩行)



奈良時代遺構変遷図 (1/1,000)



発掘区全景（奈良時代 南から）



井堰 S X02（南東から）



井堰 S X02（北東から）

6 平城京左京六条一坊十三坪の調査 第376次

- 1 事業名 スポーツ練習場建設
 2 届出者名 株式会社山岡工務店
 3 調査回数 平城京第376次調査
 4 調査地 奈良市八条二丁目882
 5 調査期間 平成9年4月21日～5月21日
 6 調査面積 150m²
 7 調査担当者 秋山成人

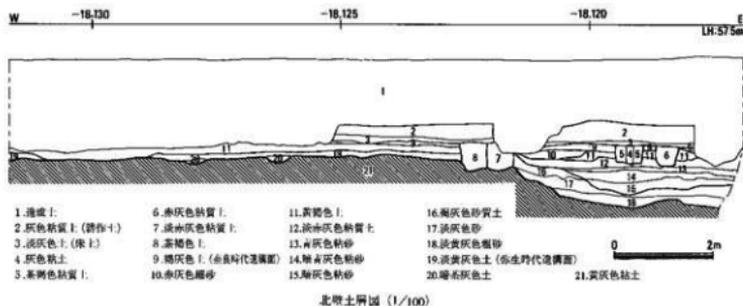


8 調査概要

調査地は、平城京の条坊復元によると左京六条一坊十三坪の南辺中央に相当し、坪の南側を六条大路が続く。周辺では平成6年度に奈良国立文化財研究所が左京六条一坊十三坪・東一坊大路の調査を行っている。この調査では十三坪の東端から東一坊大路にかけて沼状遺構を確認している。今回の調査は十三坪の宅地内の様相を知ることが目的に調査を行った。発掘区内の基本的な層相は、盛土、灰色粘質土（作土）、淡灰色土（床土）、褐色土（奈良時代遺構面 標高55.1m）、黄褐色土、淡黄灰色土（弥生時代遺構面 標高54.9m）、黄灰色粘土の地山である。地山は発掘区の西から東へ僅かに下降する。遺構には、弥生時代以前の溝4条、弥生時代の溝・流路、奈良時代の掘立柱建物4棟、掘立柱列2条がある。

S D01～04 発掘区東側において黄灰色粘土の地山上面で検出した素掘りの溝である。幅0.2～0.3m、長さ2.5～5.0m、深さ約0.1mで断面U字形を呈す。S D01は円弧状に北から南東方向、S D02・03は円弧状に北西から南方向、S D04は斜めに北西から南東方向へ続く。埋土は暗茶灰色土で遺物が出土しない為、詳しい時期はわからないが、層位から弥生時代以前のものである。

S D05 発掘区東辺において淡黄灰色土上面で検出した北西から南東へ流れる溝である。幅約4.4m以上、長さ6.8m以上、深さ1.0mで発掘区外へ延び断面逆台形を呈する。埋土の堆積は大き



く2層に分かれ、上層には淡赤灰色粘質土・青灰色粘砂・暗青灰色粘砂・暗灰色粘砂、下層には褐灰色砂質土・淡灰色砂・淡黄灰色粗砂が堆積する。下層より弥生土器の小片が出土した。重複関係から流路SD06より古いことがわかる。

SD06 発掘区東辺において黄褐色土上面で検出した北西から南東へ流れる流路である。幅1.5m、長さ6.8m以上、深さ0.2mで発掘区外へ延びる。埋土は赤灰色細砂で、遺物が出土しない為、詳しい時期はわからないが、層位から弥生時代より新しく奈良時代より古いことがわかる。

SB07 発掘区中央東側で検出した桁行2間(5.4m)以上、梁間2間(4.2m)の南北棟建物である。主軸は国土方眼方位とほぼ一致する。桁行の北から1間目の柱筋に間仕切りの柱がある。柱間寸法は桁行2.7m等間、梁間2.1m等間である柱掘形から奈良時代の土師器が出土した。重複関係からSB08より古いことがわかる。

SB08 発掘区中央で桁行4間(10.8m)、梁間2間(3.9m)以上の東西棟建物を検出した。主軸は北で西に若干振れる。柱間寸法は桁行2.7m等間、梁間1.95mである。柱掘形から奈良時代の土師器、製塩土器が出土した。

SA09 発掘区北側で検出した東西7間以上の柱列である。柱筋の方向は北で西に若干振れる。柱間寸法は2.25mである。重複関係からSA10より古いことがわかる。

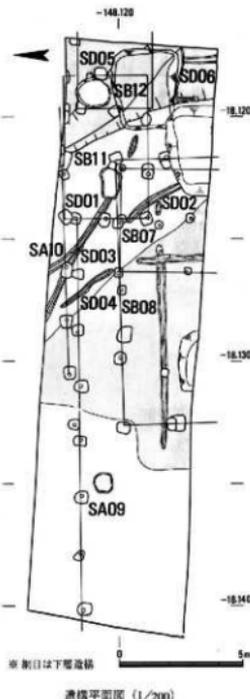
SA10 発掘区北辺沿いで検出した西から東へ続く東西5間(10.5m)以上の柱列である。主軸は北で西に振れる。柱間寸法は2.1mである。柱掘形から奈良時代の土師器が出土した。重複関係からSB11より古いことがわかる。

SB11 発掘区東側で検出した桁行3間(5.65m)、梁間2間(3.4m)の東西棟建物である。主軸は北で西に若干振れる。柱間寸法は桁行1.7-2.25-1.7m、梁間1.7mである。

SB12 発掘区東辺で検出した桁行2間(5.4m)以上、梁間(3.0m)の東西棟建物である。主軸は北で西に若干振れる。柱間寸法は桁行2.7m等間、梁間1.5m等間である。

出土遺物には黄褐色土包含層より出土した弥生土器片、溝SD05から出土した弥生時代中期中葉の壺・甕の小片、柱穴より出土した奈良時代の土師器・須恵器が少量ある。

今回の調査は、調査面積が狭く、検出した遺構の拡がりは明らかでないが、層位、遺構配置、出土遺物より大きく、弥生時代以前、弥生時代、奈良時代の各時期に区分され、奈良時代遺構面下層において遺構を確認したことから弥生時代以前に遺跡が存在するものと思われる。奈良時代には少なくとも3時期の掘立柱建物が建ち、当初坪内の敷地を区画した塀であったと考えられる柱列SA09が建ち、その後柱列SA10が建つ。この時期に塀の南側に建物SB07・08が建ち、塀がなくなった後、比較的小規模な建物SB11・12が存在していたと考えられ、坪内の敷地が少なくとも3時期にわたり利用されていたことがわかる。(秋山成人)





免強区全景（東から）



免強区中央部（北から）



免強区東辺部（南から）

7 平城京左京四条一坊十三坪の調査 第382次

- | | |
|---------|-------------------|
| 1 事業名 | 宅地造成 |
| 2 届出者名 | オーエスハウジング株式会社 |
| 3 調査次数 | 平城京第382次調査 |
| 4 調査地 | 奈良市四条大路二丁目845他 |
| 5 調査期間 | 平成9年7月16日～8月4日 |
| 6 調査面積 | 100m ² |
| 7 調査担当者 | 武田和哉 山前智敬 |



発掘区位置図 (1/6,000)

8 調査概要

調査地は、平城京の条坊復元によれば、左京四条一坊十三坪の北辺中央付近に位置する。調査地の層相は黒褐色粘質土（旧作土）以下、暗灰色砂質土、茶灰色土、暗灰色土、暗茶灰色土、暗灰色土と続き、暗茶褐色粘質土層（奈良時代整地層）を経て、黄灰色粘土の地山となる。地山上面の標高は約60.2mである。旧作土上面から奈良時代整地層上面までは約0.5m、さらに同層上面から地山上面までは約0.15mをそれぞれ測る。今回の調査で検出した遺構には奈良時代の建物2棟、井戸1基、土坑および時期不明の素掘溝がある。以下主要な遺構の概略を記す。

SB01 発掘区北東隅で検出した掘立柱建物。東西1間（1.8m）、南北2間（1.8-1.5m）を検出。

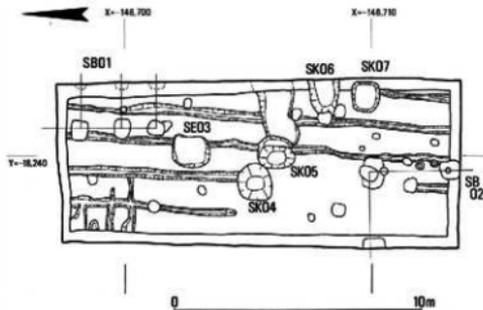
SB02 発掘区南西隅で検出した掘立柱建物。東西・南北各1間（共に3.0m）を検出。

SE03 発掘区の中央北寄りで検出した井戸。掘形は平面隅丸方形を呈し、径は約1.3mである。枿材の大半は抜き取られていたが、残存していた枿材の状況から方形横板組隔柱留の枿材であった可能性が高い。埋土からは奈良時代の土器が出土した。

SK04～07 発掘区の中央および南東部分で検出した土坑。各掘形は平面円形を呈し、径1.1～1.4m、深さは0.5～0.2m。埋土からは奈良時代の土器が出土した。（武田和哉）



発掘区全景（南から）



遺構平面図 (1/200)

8 大安寺遺跡・平城京五条二坊三坪の調査 第383次

- | | |
|---------|-----------------|
| 1 事業名 | 浴場建設 |
| 2 届出者名 | 株式会社アースランド |
| 3 調査回数 | 平城京第383次調査 |
| 4 調査地 | 奈良市大安寺町510-1他 |
| 5 調査期間 | 平成9年7月22日～8月27日 |
| 6 調査面積 | 625㎡ |
| 7 調査担当者 | 森下浩行 久保清子 |



8 調査概要

これまでに平城京左京五条二坊三坪内では、第383次調査地の北側で昭和56年度に第20次調査を実施している。この調査は未報告のため、今回の第383次調査とまとめて報告する。

第20次調査

この調査は奈良市人安寺町521番地他において実施した株式会社民芸肉料理はや届出（S56年、第3112号）の店舗建設に伴う発掘調査である。調査期間は昭和56年11月10日から12月28日である。調査面積は744㎡で、篠原豊一が担当した。

発掘調査は建物予定地に第1発掘区、防火水溝予定地に第2発掘区、二・三坪坪境小路推定地に第3～5発掘区を設定して行った。発掘区の層相は、上から黒色土（作土）、淡黄灰色砂質土と続き、現地地表0.3～0.4mで明黄灰色粘質土の地山となる。地山面は北西から南東に向かって下がっている。地山上面で遺構を検出した。遺構面の標高は、57.3～56.8mである。

I 検出遺構

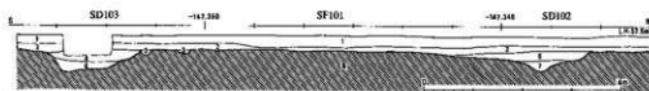
古墳時代中期の遺構と奈良時代の遺構を検出した。

古墳時代の遺構 古墳時代前期の井戸SE01と時期不明の土坑SK02がある。

SE01 第2発掘区で検出した掘形の平面形が円形の素掘りの井戸である。大きさは最大径2.6m、深さ1.2mである。埋土から布留式土器（新）が出土した。

SK02 第2発掘区で検出した土坑である。大きさは最大径0.7m、深さ0.3mである。埋土から遺物は出土しなかった。土層の重複関係からSE01より古いことがわかる。この他に第5発掘区西半で古墳時代以前の小柱穴をいくつか検出したが建物としてはまとまらない。

奈良時代の遺構 条坊関連遺構には二・三坪坪境小路SF101と南側溝SD103・北側溝SD102がある。三坪内の遺構には、溝SD104、掘立柱建物SB105～108、井戸SE109がある。



1. 黒色土（作土） 2. 淡黄灰色砂質土 3. 灰黄色土 4. 淡黄灰色粘質土 5. 赤褐色砂質土 6. 淡黄灰色砂質土 7. 灰黄色砂土 8. 明黄灰色粘質土（地山）

第20次調査：二・三坪坪境小路土層図 (1/100)

S F 101 第2～5発掘区で検出した二・三坪坪境小路である。検出した路面幅は6.2mである。両側溝心からの路面心は、 $X=-147,348.76$ 、 $Y=-17,948.00$ である。

S D 102 第2～5発掘区で検出した幅0.7～2.8m、深さ0.4mの東西方向の素掘りの溝で、その位置から小路北側溝と考えられる。溝心の国土座標は、 $X=-147,844.24$ 、 $X=-17,948.00$ である。埋土から奈良時代末の土器が出土した。

S D 103 第1・3発掘区で検出した幅1.9～2.3m、深さ0.4mの東西方向の素掘りの溝である。その位置から小路南側溝と考えられる。溝心の国土座標は、 $X=-147,352.26$ 、 $X=-17,948.00$ である。埋土から奈良時代の土器が出土した。

S D 104 第1発掘区で中央で検出した南北方向の素掘りの溝である。最大幅1.8m、深さ0.6mあり、長さ16.0m分を検出した。溝底は北に向かって低くなっており、北端で南側溝S D 103と接続していたと考えられる。埋土から奈良時代後半の土器が出土した。この溝は三坪の東西をほぼ1/2に区画する位置（三坪遺構概念図参照）にあたる。

S B 105～108 掘立柱建物4棟がある。重複関係から2時期の変遷がある。建物の概要については一覧表にまとめた。

S E 109 第1発掘区の北西隅で検出した井戸で、掘形は平面円形に復元できる。杵痕跡と横板の一部が残るのみで、井戸杵の組合せはわからない。掘形の大きさは、径1.9m、深さ0.64mである。杵内から少量の奈良時代の土器が出土した。

この遺構の他に平面が不整形形の浅い土坑が2基ある。いずれも奈良時代の土器が出土した。

II 出土遺物

出土遺物には弥生土器、古墳時代中期の土師器、奈良時代から平安時代初頭の瓦・須恵器・土



第1発掘区全景（東から）



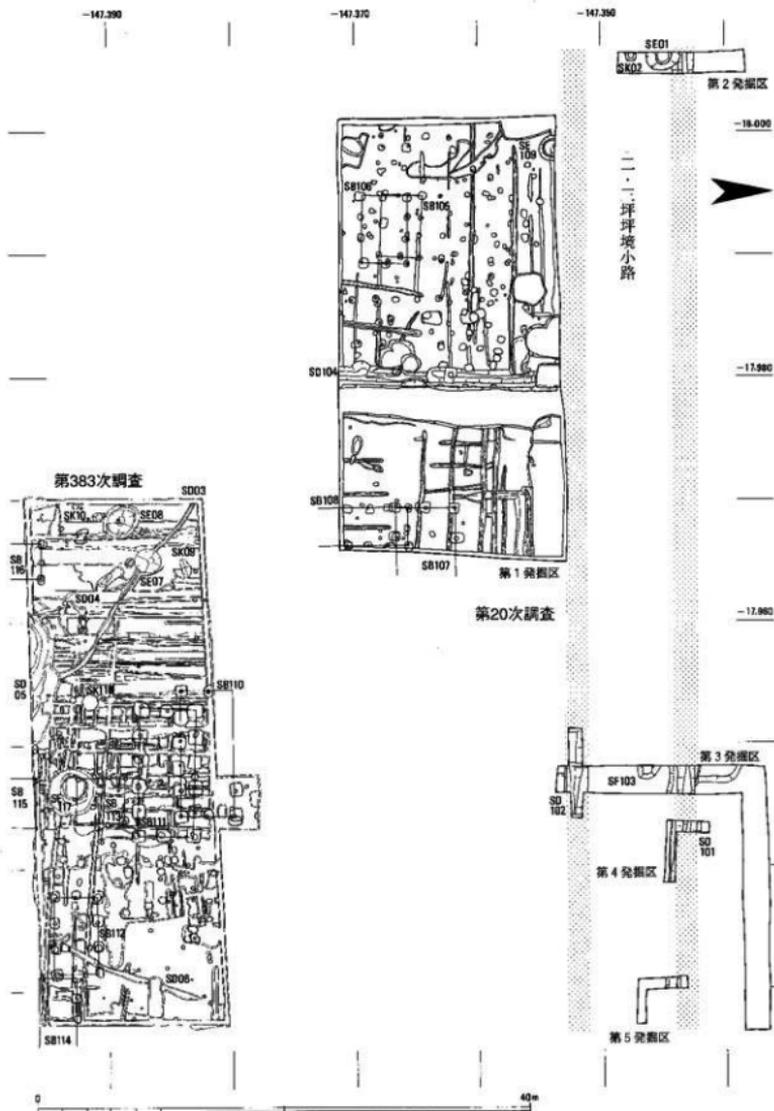
第1発掘区（北から）



第3～5発掘区全景（西から）



第2発掘区全景（南から）



第20次・第383次調査遺構平面図 (1/400)

師器、室町時代の瓦質土器甕、時期不明の小型大形土製品、砥石が遺物整理箱で9箱分ある。弥生土器は遺物包含層、柱穴から出土したが細片で時期は不明である。古墳時代の井戸SE01から布留式土器(新)が出土した。この土器については第383調査の項でまとめて報告する。奈良時代の遺物は遺物整理箱で8箱出土した。その内、瓦は遺物整理箱で2箱あるが軒瓦は出土していない。

(篠原豊一)

第383次調査

調査地は、第20次調査の南側に隣接し、三坪の北東部に位置する。層相は、調査区西半では黒灰色土(作土)、灰色砂質土と続き、現地表下0.2mで黄灰色シルトの地山となる。調査区の東半ではさらに灰褐色土の遺物包含層が東に向かうほど厚く堆積しており、現地表下約0.5mで黄褐色粘土もしくは灰黄褐色砂の地山に達する。地山上面の標高は、調査区西端で57.1m、東端で56.8mである。いずれも地山上面で検出した。

I 検出遺構

古墳時代の遺構と奈良時代の遺構を検出した。

古墳時代の遺構 検出した遺構には、溝・井戸・土坑がある。

SD03 幅0.3~0.7m、深さ0.15mの南東方向に流れる素掘りの溝で、南端でSD05と接続している。重複関係からSE07よりも古い。

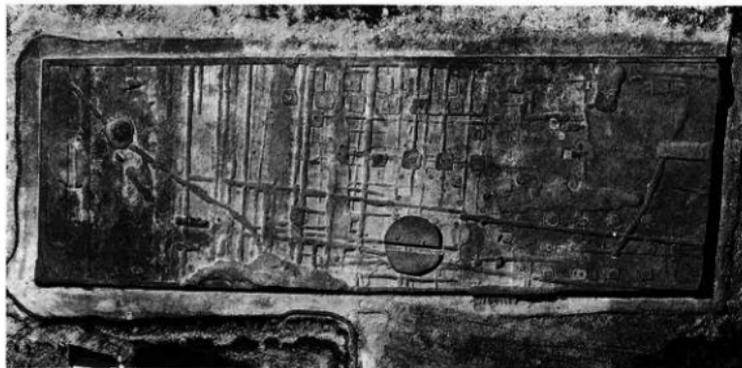
SD04 幅0.6~0.9m、深さ0.15~0.4mの素掘りの溝である。SD03と一連の溝である可能性が高い。

SD05 幅0.9~2.3m、深さ0.4~0.5mの蛇行する素掘りの溝である。埋土中から古墳時代の上師器が出土した。重複関係からSB115よりも古い。

SD06 幅0.4~0.6m、深さ0.05~0.15mで南西方向に流れる素掘りの溝である。

SE07 径2.1m、深さ0.86mの平面が円形の素掘りの井戸である。埋土中から古墳時代の上師器が出土した。重複関係からSD03よりも新しい。

SE08 長径3.3m、短径2.5m、深さ1.1mの平面が不整形の素掘りの井戸である。埋土中からは古墳時代の上師器が出土した。重複関係からSK10よりも新しい。



発掘区全景(上が北)

建物一覧表

遺構番号	棟方向	規模 (桁行×梁間)	桁行全長 m (尺)	梁間全長 m (尺)	桁行柱間 寸法m(尺)	梁間柱間 寸法m(尺)	階の出 (m)	備考
SB105	東西	3×2	4.95 (16.5)	3.3 (11)	内から1.8- 1.35-1.8	1.65 (5.5)		
SB106	東西	3×2	5.4 (18)	3.6 (12)	1.8 (6)	1.8 (6)		
SB107	東西	2以上×2	2.4 (8)	4.8 (16)	2.4 (8)	2.4 (8)		SB108より新しい
SB108	南北	3以上×2	4.95 (16.5)	3.0 (10)	1.65 (5.5)	1.5 (3)		SB107より古い
SB110	東西	5×2	10.5 (35)	4.35 (14.5)	2.1 (7)	内から 2.1-2.25		SB111より新しい
SB111	東西	5×2	10.35 (34.5)	4.35 (14.5)	内から2.1-2.1 2.1-1.95-2.1	内から 2.25-2.1		SB110より古い
SB112	東西	3×2	6.3 (21)	3.6 (12)	2.1 (7)	1.8 (6)		
SB113	南北	3×2	3.9 (13)	3.6 (12)	1.3	1.8 (6)		SE117より新しい
SB114		1以上×2以上	3.3 (11)		1.65 (5.5)			東西棟建物か
SB115		1以上×2		4.0		2.0		
SB116		1以上×2		3.0 (10)		1.5		

SK09 長径1.6m、短径0.6m、深さ0.5mの平面が長円形の土坑である。

SK10 長径1.0m以上、短径0.6m、深さ0.2mの平面が長円形の土坑。埋土中から古墳時代の土師器が出土した。重複関係からSE08よりも古い。

奈良時代の遺構 検出した遺構には、掘立柱建物・井戸・土坑がある。

SB110～116 掘立柱建物7棟がある。重複関係から2時期以上の変遷がある。建物の概要については一覧表にまとめた。

SE117 長径3.8m、短径3.58m、深さ4.35mの井戸で、井戸枠はすべて抜き取られている。枠抜き取り穴の掘形は平面が不整形である。枠抜き取り穴から少量の奈良時代の土師器が出土した。重複関係からSB113よりも古い。

SK118 長径1.31m、短径1.23m、深さ0.9mの平面が不整形の土坑である。埋土の状況から、土坑は短期間に埋まっている。(久保清子)

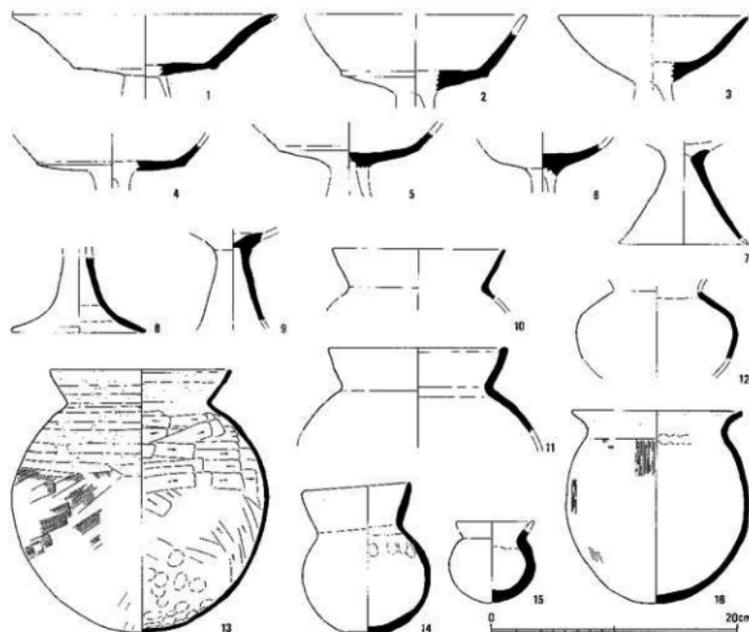
II 出土遺物

弥生時代の土器、古墳時代の土師器・須恵器、奈良時代の土師器・須恵器・瓦、中・近世の瓦器・土師器・陶磁器、ほかが出土した。第20次調査分を合わせて、遺物整理箱9箱分である。そのうち、古墳時代の井戸SE01・08出土の土師器について報告する。

1～12・15・16はSE01出土でいずれも破片である。器壁の剥落が著しく、調整は不明瞭である。13・14はSE08出土で、いずれも全存している。1～6は高杯形土師器の杯部である。1・2・4は底部と口縁部の境に明瞭な段がある。口径は1が20.1cm、3が15.0cmである。7～9は高杯形土師器の脚部である。8は屈曲して裾が広がる。径10.6cm。10・11・13・16は壘形土師器である。口径は、10・11が14.0cm、13が14.4cm、16が13.7cmである。器高は、13が21.4cm、16が15.6cmである。16の口縁は体部から緩やかに屈曲する。10・11・13の口縁は、体部からくの字状に屈曲し、10はそのまま外傾して広がり、端部は丸い。11・13は内彎気味に広がり、端部が内側に肥厚する。体部は13がほぼ球形、16はやや胴長形である。底部は13・16ともに丸い。調整は、13の体部内面がケズリ、外面がハケとナデ、口縁部は内外面ともにナデである。12・14・15は壘形土師器である。14は口径8.4cm、器高12.0cmである。15は小形品。いずれも球形の体部で、14・15は底も丸いが、14はわずかに平坦面がある。(森下浩行)

III まとめ

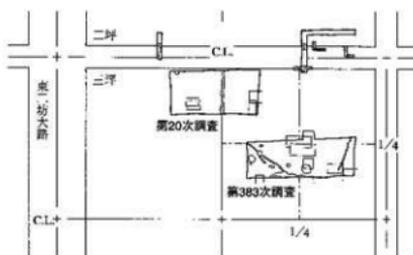
三坪の北東部の様相についてまとめる。調査地北西一帯では弥生～古墳時代の複合遺跡である



井戸 S E 01・08出土土器 (1/4)

柏木遺跡・南新遺跡がひろがっており、第338・365・370次調査（本概報所収）では方形周溝墓群等、第249次調査では古墳時代集落跡を確認しているが¹⁾、今回の調査でも古墳時代の遺構を検出した。奈良時代の遺構については、第20次調査では二・三坪坪境小路を検出し、三坪の北限が明らかになった。また坪内を南北にはしる素掘りの溝 S D 104は坪のほぼ東西1/2ライン上に位置していることがわかった。この溝がどこまで続いているのかは、現段階では不明であるが、少なくとも坪内を東西に分割して利用していた時期があるといえよう。また第383次調査で検出した掘立柱建物 S B 110・111は坪の北東1/4坪部分の中心付近に位置しており、また他に検出した建物に比べて規模が大きい。以上のことから考察すると、三坪の北東部では坪を1/4に分割して宅地として利用していた時期があり、S B 110・111が宅地内での中心的建物であった可能性が高い。

(久保清子)



三坪遺構概念図 (1/2,000)

① 『奈良正倉院の古墳調査報告』中巻(44頁) 奈良市教育委員会 1999

9 杉ヶ町遺跡・平城京左京四条五坊十二坪の調査 第388次

- | | |
|---------|-------------------|
| 1 事業名 | 共同住宅新築 |
| 2 届出者名 | 株式会社丸紅 |
| 3 調査回数 | 平城京第388次調査 |
| 4 調査地 | 奈良市杉ヶ町37-4他3筆 |
| 5 調査期間 | 平成9年10月6日～11月6日 |
| 6 調査面積 | 345m ² |
| 7 調査担当者 | 原田憲二郎 |



発掘区位置図 (1/6,000)

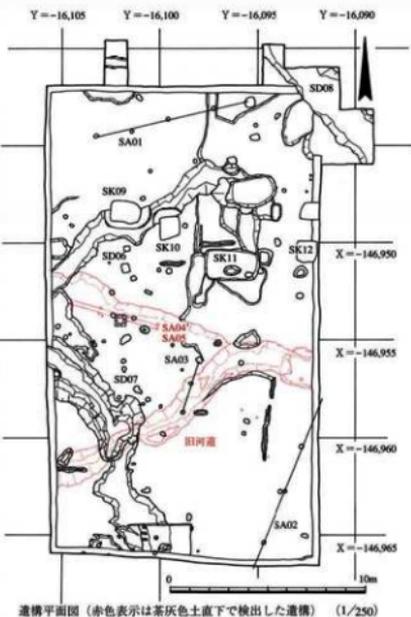
8 調査概要

調査地は、平城京の条坊復元によると、左京四条五坊十二坪の北辺にあたる。調査は左京四条五坊十一・十二坪坪境小路の確認と、十二坪内の様相確認を主目的とした。なお左京四条五坊十二坪の調査は過去に本調査区の西で一箇所（市第144次）、南で一箇所（市第372次）の計二箇所で行われている。第144次調査では弥生時代後期の竪穴住居を検出し杉ヶ町遺跡と呼称されている¹⁾。第372次調査では遺構は確認していないが、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器が出土している²⁾。このようなことから、杉ヶ町遺跡の様相・範囲確認も目的とした。

発掘区の基本的な層相は、盛土、旧作土、灰褐色砂質土と続き、地表下約0.9mで、黄色粘土の地山にいたる。この地山上面（標高66.9m）で遺構検出を行った。また調査区南半では灰褐色砂質土と黄色粘土の間に、茶灰色土が広がっていた。このため調査区南半では、茶灰色土上面とその下の地山上面（標高66.6m）の二面で遺構検出を行った。この茶灰色土からは土器の細片しか出土しなかったため時期は不明である。なお、この茶灰色土直下で旧河道を1条検出した。幅約1.5m、検出面からの深さ0.15～0.3mで河底は北東から南西へゆるやかに下る。長さ約14m分検出した。東、西側は発掘区外へ続く。埋土は灰色粗砂で、遺物は出土しなかった。

検出遺構には掘立柱塼、素掘溝、土坑がある。以下に主な遺構について記す。

SA01は発掘区北辺で検出した掘立柱塼である。主軸は東で北に振れる。柱間は東から

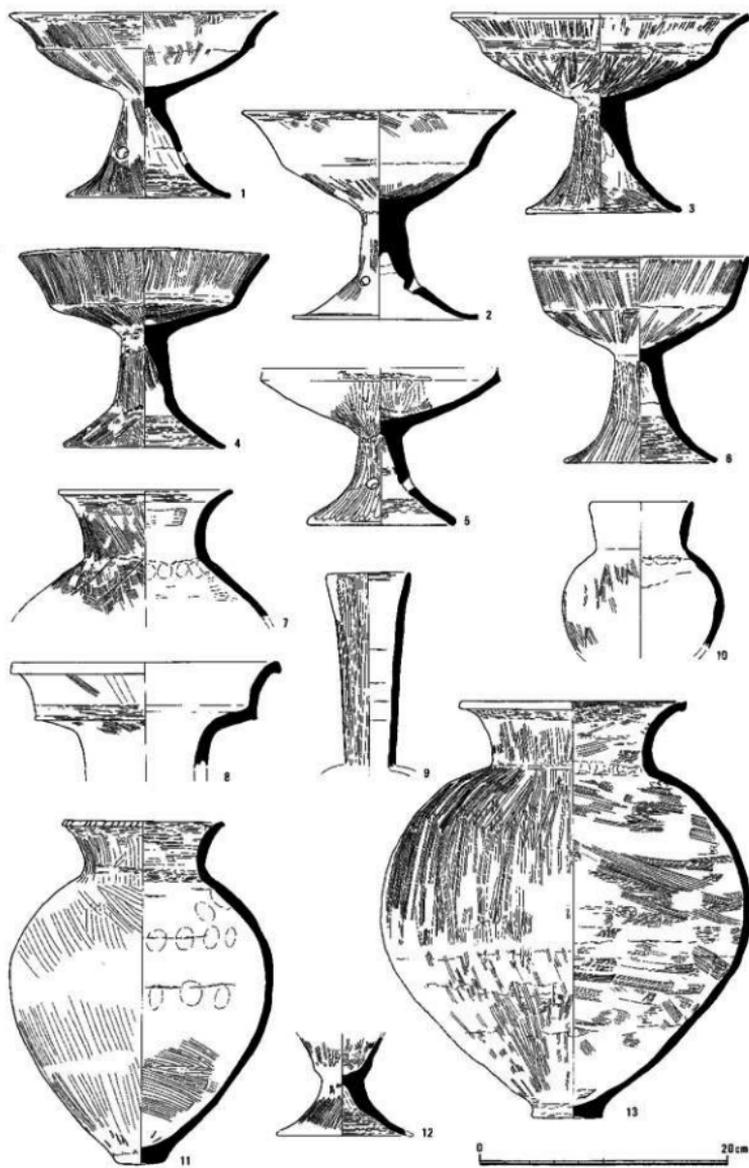


遺構平面図（赤色表示は茶灰色土直下で検出した遺構） (1/250)

1.8-2.1-1.8-1.8mである。SA02は発掘区南東隅、茶灰色土直上で検出した掘立柱塼である。主軸は北で東に振れる。柱間は南から2.7-2.4mである。SA03は発掘区中央、茶灰色土直上で検出した掘立柱塼である。主軸は北で東に振れる。柱間は南から1.5-1.2mである。SA04は発掘区中央、茶灰色土直下で検出した掘立柱塼である。主軸は東で南に振れる。柱間は1.5m等間である。SA05はSA04の南側、茶灰色土直下で検出した掘立柱塼である。主軸は東で南に振れる。柱間は1.5m等間である。SA04・05は近接し、規模、振れも同じであることから建て替えであるとおもわれる。SD06は発掘区中央、茶灰色土直上で検出した素掘りの溝である。幅1.0-1.5m、検出面からの深さは0.06-0.3mである。北側は後世の遺構に削平されているが、長さ約11m分を検出した。南側は発掘区外へと続く。埋土は上から順に茶灰色砂質土、灰褐色砂質土である。埋土から弥生時代後半から平安時代前半にかけての土器、土製品が出土した。出土遺物の大半は弥生時代後半から古墳時代前半のものであるが、溝底から10世紀前半の土器片が出土した。SD07は発掘区西辺、茶灰色土直上で検出した素掘りの溝である。幅約1.6-2.5m、検出面からの深さ0.3-0.4mである。埋土は上から順に茶灰色砂質土、灰色粘砂である。SD08は発掘区北東隅で検出した素掘りの溝である。当初の発掘区では南岸の検出にとどまるため、北東部に拡張区を設けた。その結果北岸を検出し、幅約2mであることが判明した。検出面からの深さ約0.3-0.5mで溝底は北西から南東へゆるやかに下る。長さは約8m分検出した。埋土は上から順に灰色粘土、灰色砂、暗青灰色粘土で、出土遺物の大半は灰色粘土層から出土した。溝内からは弥生時代後半から古墳時代前半にかけての土器が出土した。SK09は発掘区中央で検出した土坑である。東西約1.5m、南北約1.1mで平面長方形を呈する。検出面からの深さは、約0.4mである。埋土は上から暗灰色粘土、灰色粘土で、灰色粘土層から12-13世紀の土器の細片が出土した。遺構の重複関係から、SD06より新しいことがわかる。SK10はSK09の東側で検出した土坑である。東西約1m、南北約1.1mで平面ほぼ正方形を呈する。検出面からの深さは約0.4mである。埋土は上から黄灰色粘砂、灰色粘砂で、坑内から14-15世紀の土器が出土した。遺構の重複関係からSD06より新しいことがわかる。SK11は発掘区中央で検出した土坑である。東西約2.8m、南北約1.5mで平面長方形を呈する。検出面からの深さは、約0.3mである。埋土は灰色粘土で、坑内から16世紀の土器が出土した。SK12は発掘区中央東端で検出した土坑である。東西約1m、南北約1.1mで平面正方形を呈する。検出面からの深さは約0.3mである。埋土は灰色粘土である。埋土から16世紀頃の土器が出土した。(原田憲二郎)

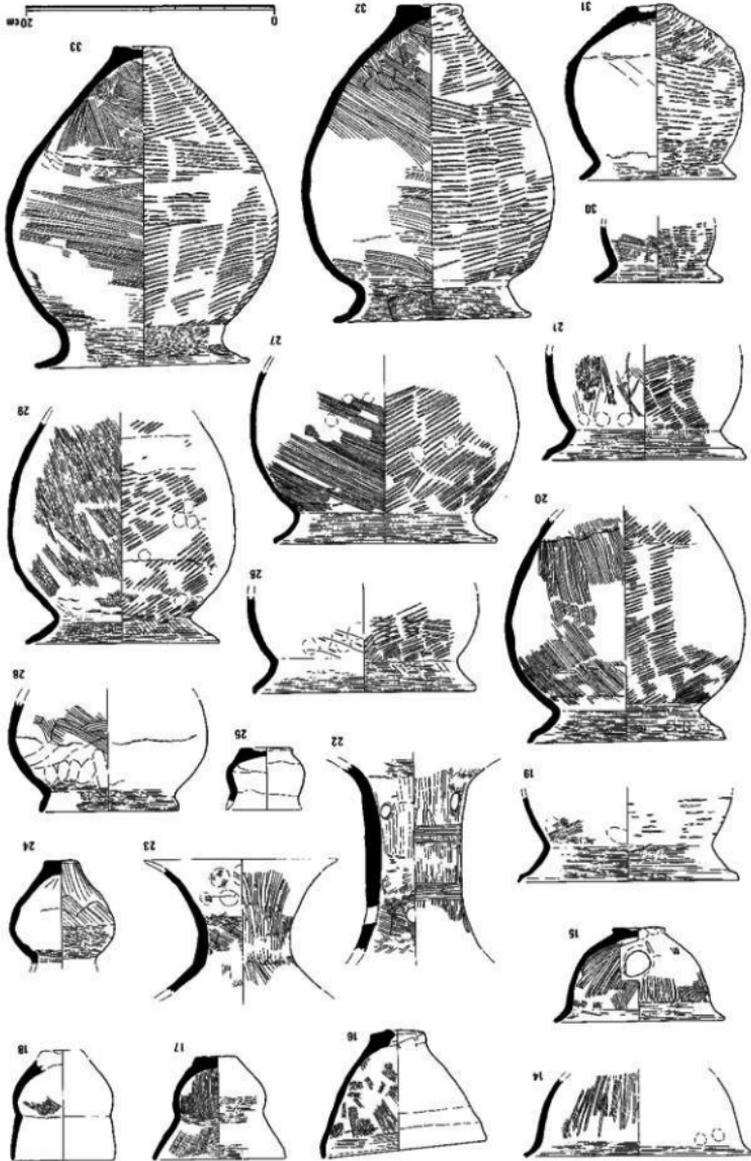
出土遺物には弥生土器が遺物整理箱9箱分、平安時代の土器が数点、室町時代の土器が1箱分、時期不明の土製品が2点出土した。この内、弥生時代の土器の一部と土製品について報告する。SD08出土の弥生土器には、高杯形土器、壺形土器、甕形土器、鉢形土器、器台形土器、手焙形土器がある。いずれも平底で、ドーナツ形を成すものが多い。壺形土器、甕形土器は最大径が体部上半にあることが多い。調整は、口縁部はいずれの器種にもナデがみられる。体部外面は甕形土器の大半にタタキがみられるが、それ以外の器種はミガキが多い。内面はハケが多いが、高杯形土器、鉢形土器、器台形土器の一部にミガキがみられる。

高杯形土器 (1~6) 口径17.7-23.8cm、器高12.8-17.0cm。口縁部が屈曲して外反するもの(1~3)、屈曲して外傾するもの(4・6)、屈曲せずに短くつまみあげるもの(5)がある。6はやや直立気味で口径がやや小さい。5は器高がやや低い。1・2・5は、脚部に凹孔がある。調整は口縁部は内外面ともにナデ、ハケののち、ミガキ。脚部は外面がミガキあるいはハケ、あるいはナデである。



漢 S D 出土土器 (1/4)

图 5 出土陶器 (1/4)



壺形土器 (7~13・17・18・24) 広口壺 (7・11・13)、二重口縁壺 (8)、細頸壺 (9)、短頸壺 (10)、長頸壺がある。7は口径13.7cm。11は口径12.7cm、器高27.0cm。13は口径18.1cm、器高34.0cm。7・11・13は口縁部が外反し、7の端部は丸く、11・13の端部は外側に面をなす。11の端面には刻み目がみられる。体部の最大径はいずれも上半部にある。7の体部上半には2条のヘラ描きがみられる。調整は、外面がハケで口縁部にナデ、内面はハケ、ナデである。8は口径21.3cm。端部は外側に面をなす。9は口径6.6cm、口頸部の長さ15.7cm。外面にミガキ。10は口径8.2cm。

12・17・18・24は小形品である。17は口径10.5cm、器高8.4cm、18は口径8.2cm。24は11の小形品で、口縁部が短い、17・18は口縁部が長い。17の口縁部は外傾し、18の口縁部は内彎気味にほぼ直立する。17の外面はナデ、内面はハケである。12は脚付きで、口縁部と体部の境が明瞭でない。24は体部下半はハケ、上半はハケのちにヨコナデである。

鉢形土器 (14~16) 14は口径18.2cm。15は口径17.5cm、器高7.6cm。16は口径14cm、器高9.9cm。14・15は口縁部が外傾し、16は直立する。調整は、口縁部が14は内外面ともにナデ、15・16は外面がナデ、内面がハケである。体部は15の外面がミガキとハケ、14・15の内面がミガキ、16の内面がハケである。15は、側面に円孔を穿っている。16の底には焼成前に円孔を穿っており、瓶と考えられる。

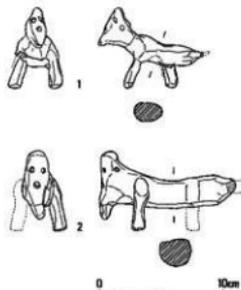
器台形土器 (22・23) ともに口縁端部、脚端部を欠くが、円筒の体部である。22の体部は長く、23は短い。器高も22が高いものと思われる。調整は外面がミガキ、内面がハケであるが、22の下半部にはミガキがみられる。22の体部には上下2箇所に擬門線がみられ、その外側の口縁部あるいは脚部との境に円孔を配する。

甕形土器 (19~21・25~33) 口縁部が外反、あるいは外傾し、端部がやや屈曲して外傾するもの (19~21)、端部をほぼ垂直につまみあげるもの (26・27)、端部をさらに外反させるもの (32・33)、そのまま端部となるもの (28~31) がある。19~21は口径15.6~17.9cm。26・27はいずれも口径17.8cm。32・33は口径15.5~16.8cm、器高25.4~26.0cm。28は口径11.0cmで、口縁部はやや直立気味である。29は口径15.6cm。30・31は、やや小形で、30の口径は10.0cm、31は口径12.4cm、器高14.0cmで、下ぶくれの体部である。ほかは体部最大径が上半部にある。調整は、口縁部は外面がタテハケのちヨコナデ、内面がヨコナデとヨコハケで、体部は外面がタタキ、内面がハケである。25は手づくねのミニチュアである。

(森下浩行)

土製品 1・2はSD06の下層、灰褐色砂質土層から出土した。馬を表現したものであろうが、目、鼻、耳を棒状の工具による刺突で表現する。1は口を線刻で表現している。脚部の付け方には違いがみられ、1は体部の底面に脚部を付けたものであるが、2は体部の側面に脚部を貼り付けている。SD06からは弥生時代後半から平安時代前半までの土器が出土しており、時期を決定しがたいが、胎土が精良であることなどから、奈良時代のものとも考えられる。そうであれば、平城京内から出土する土馬とは顔の表現方法や製作技法が異なるので、撮入されたものかもしれない。

(池田裕英)



1) 奈良の教育委員会「平城京内宮内庭出土の土器の調査報告」

2) 奈良の教育委員会「平城京内宮内庭出土の土器の調査報告」

漢SD06出土土製品 (1/4)



発掘区全景（南から）



発掘区全景（北から）

10 下ツ道・平城京朱雀大路の調査 第389次

1 事業名	分譲住宅建設
2 届出者名	株式会社栗実住宅 株式会社オークホーム
3 調査次数	平城京第389次調査
4 調査地	奈良市三条大路三丁目961
5 調査期間	平成9年10月6日～11月6日
6 調査面積	45m ²
7 調査担当者	久保清子



8 調査概要

調査地は、平城京の条坊復元では朱雀大路の四条部分にあたる。また、大路の路面東端にあたるため、これまでの朱雀大路の発掘調査結果から下ツ道を想定できた。さらに調査地の北西において平成2年度に実施した市第197次調査では弥生時代の竪穴住居を検出している。今回はこれらの調査成果をふまえて、朱雀大路造営以前の状況を確認することを目的とした。

層相は、盛土 (0.5m) の下に作土 (0.2m)、床土 (0.1m)、灰褐色粘質土 (0.1m) と続き地表下0.9mで黄褐色粘土の地山となる。地山上面の標高は概ね62.2～3mである。

下ツ道及び東側溝 (SF01・SD02)、朱雀大路 (SF03)、溝2条 (SD04・05)、柱穴2かある。遺構はすべて地山上面で検出した。

SF01・SD02 下ツ道である。路面幅1.4m分を検出した。東側溝SD02は幅7.0m以上、深さ1.36mの南北溝。溝の西岸はあふれたため広がっている。堆積土の状況から溝は改修されていると考えられる。埋土からは若干の土器、瓦片が出土したが、いずれも摩耗が激しく、時期が判明したのは弥生後期の土師器甕底部1点のみである。溝心の国土地座標はX=-146,661.00m、Y=-18,570.23mで、調査地の南で平成7年度に実施した市第328次調査で検出した下ツ道東側溝の延長上に位置することがわかった。

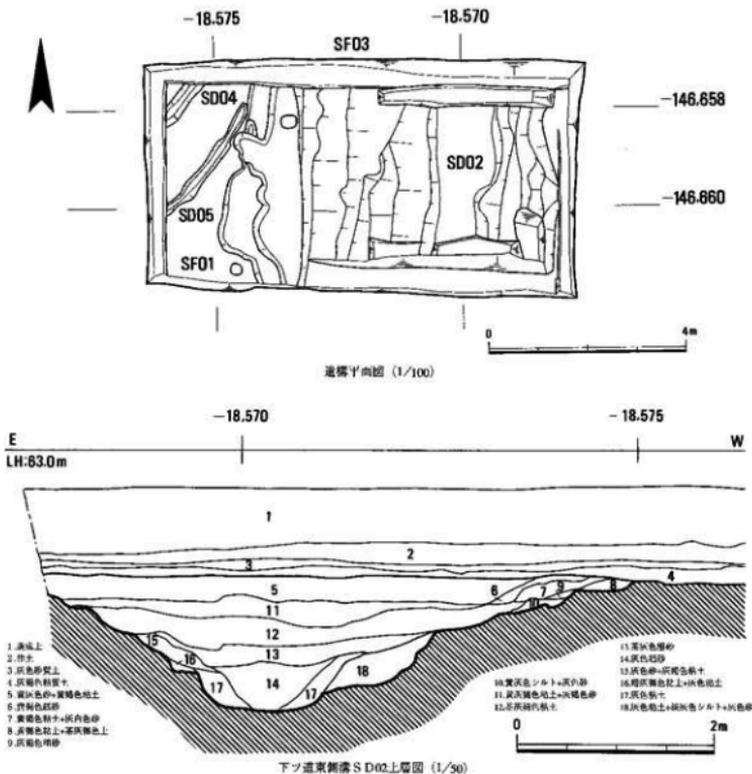
SF03 朱雀大路で路面幅9.5m分を検出した。石敷き等の痕跡はみられなかった。

SD04・05 SD04は幅0.36m、深さ0.2m、長さ2.0m以上の南西方向に斜行する素掘りの溝である。SD05は幅0.16～0.3m、深さ0.06m、長さ3.2m以上で、SD04と並行する素掘りの溝である。いずれも埋土から出土遺物がなく他の遺構と重複関係がないため、時期を特定できないが、周辺で奈良時代以前の遺構が確認されていることから、これらの溝も朱雀大路造営以前の時期である可能性が考えられる。

今回の調査で、下ツ道に関する新たな資料を得ることができた。なお、これまでの調査成果を一覧表にした。(久保清子)



発掘区全景 (北から)



下ツ道東新溝四上層図一覧表

地点名	X	Y	備考
平城宮1次大極殿南門下ツ道東新溝①	-145,402.55	-18,577.99	『平城宮発掘調査報告 Ⅱ』 奈良国立文化財研究所 1983
平城宮1次大極殿南門下ツ道東新溝②	-145,434.13	-18,548.04	『平城宮非重人跡発掘調査報告』 奈良府教育委員会 1982
平城宮朱雀門下ツ道東新溝	-145,948.00	-18,575.69	『平城宮発掘調査報告 Ⅲ』 奈良国立文化財研究所 1978
平城宮朱雀門下ツ道東新溝	-145,948.00	-18,598.49	『平城宮発掘調査報告 Ⅳ』 奈良国立文化財研究所 1978
三条一坊下ツ道東新溝 H119次	-146,161.00	-18,574.60	『奈良市埋蔵文化財調査報告書』 昭和61年度 奈良市教育委員会 1987
三条一坊下ツ道東新溝 H119次	-146,161.00	-18,597.04	『奈良市埋蔵文化財調査報告書』 昭和61年度 奈良市教育委員会 1987
三条一坊下ツ道東新溝 H356次	-146,236.62	-18,573.72	奈良市教育委員会 未報告
三条一坊下ツ道東新溝 H356次	-146,232.25	-18,597.08	奈良市教育委員会 未報告
四条一坊下ツ道東新溝 H389次	-146,661.00	-18,570.23	未報告
四条一坊下ツ道東新溝 H389次	-146,811.00	-18,570.20	『奈良市埋蔵文化財調査報告書』 平成7年度 奈良市教育委員会 1997
五条一坊下ツ道東新溝 H103次	-147,353.877	-18,570.20	『奈良市埋蔵文化財調査報告書』 昭和60年度 奈良市教育委員会 1986
五条一坊下ツ道東新溝 H103次	-147,353.877	-18,588.80	『奈良市埋蔵文化財調査報告書』 昭和60年度 奈良市教育委員会 1986
六条一坊下ツ道東新溝 H103次	-147,797.00	-18,565.00	『平城宮朱雀大路発掘調査報告』 奈良市教育委員会 1982
六条一坊下ツ道東新溝 H103次	-147,870.00	-18,588.40	『奈良市埋蔵文化財調査報告書』 奈良市教育委員会 1982
六条一坊下ツ道東新溝 H124次	-147,915.00	-18,564.013	『奈良市埋蔵文化財調査報告書』 昭和61年度 奈良市教育委員会 1987
春日園遺跡下ツ道東新溝	-151,171.088	-18,555.939	『大和郡山形遺文化財発掘調査報告書 第3集 春日園遺跡下ツ道東2,3次発掘調査報告書』 大和郡山形市教育委員会 1992
春日園遺跡下ツ道東新溝	-151,675.00	-18,547.20	『奈良県埋蔵文化財調査報告書』 1980年度 奈良考古学研究所 1982
春日園遺跡下ツ道東新溝	-151,675.00	-18,571.50	『奈良県埋蔵文化財調査報告書』 1980年度 奈良考古学研究所 1982

11 平城京左京三条三坊三坪の調査 第391次

- | | |
|---------|-------------------|
| 1 事業名 | 共同住宅建設 |
| 2 届出者名 | 株式会社ウツミ |
| 3 調査次数 | 平城京第391次調査 |
| 4 調査地 | 奈良市大宮町四丁目463-1他 |
| 5 調査期間 | 平成9年11月25日～12月26日 |
| 6 調査面積 | 268㎡ |
| 7 調査担当者 | 山前智敬 |



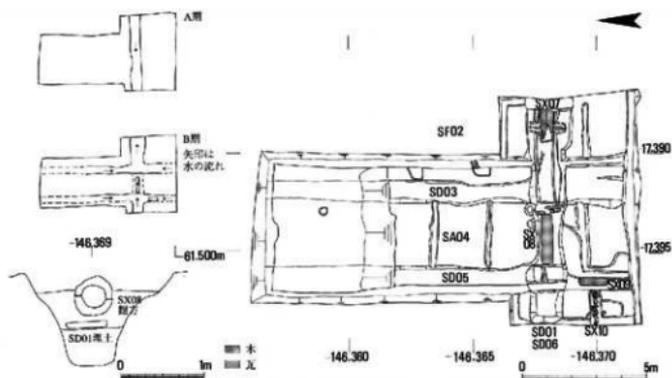
発掘区位置図 (1/6,000)

8 調査概要

調査地は平城京の条坊復元では左京三条三坊三坪の中央東辺にあたり、調査地東よりに、三・六坪の坪境小路が想定されている。なお、西側約20mには佐保川が流れており、川の氾濫によって遺構面が削平されている可能性も考えられた。そこで今回の調査では、遺構面の確認を目的とし調査を行った。

調査区の基本的な層相は、盛土、灰色砂、明灰色砂、明灰白色砂、灰色粘土、茶灰色粘質土、灰褐色粘質土と続き、現地表下約1.9mで明茶色砂礫または青灰色粘土の地山に至る。地山上面の標高は概ね61.3mである。

検出した遺構としては、奈良時代の三・六坪坪境小路 (SF02) および西側溝 (SD03)、三坪の東を限る築地 (SA04) および雨落溝 (SD05)、素掘溝 (SD01)、暗渠 (SX08)、木樋 (SX09)、柱穴、土坑等を検出した。いずれも地山上面で検出した。なお北半部は遺構面が



遺構平面図 (S=1/200)、SX08断面図 (S=1/60) 遺構変遷図

ら約0.3m～0.4m程深く掘りすぎている。

三・六坪坪境小路がない時期をA期、ある時期をB期とする。

A期 S D01、柱穴がある。

S D01 東西方向の素掘りの溝。幅約1.0m。長さ9.0m分を確認した。検出面からの深さ約1.0mで、壁はほぼ垂直に掘り込んでいる。溝の東半には護岸の横板が残存している。横板が残っている部分より下は灰色砂の地山であり、その砂が崩れないように護岸していたのであろう。固定方法は杭を使用していたと思われるが、地山が砂であるのでその痕跡は確認できなかった。また西半についても同様の地山が続くので当初は全面的に護岸していたと思われる。溝底は東から西に向かって下り勾配である。またS F02上に柱穴が数個あり、重複関係をみてもS D03よりも古いので、この時期には坪境小路は存在せず、三・六坪を含む2坪以上を一括利用した宅地であったと思われる。埋土から奈良時代の土師器・須恵器、丸瓦、平瓦、軒丸瓦6012A a 1点、6284E 1点、6668A 1点、6685C 1点、棒状木製品3点などが出土した。

B期 S F02、S D03・05・06、S A04、S X07・08・09がある。

S F02 三・六坪坪境小路である。路面幅4.0m分を確認した。路面には舗装などの痕跡はみられなかった。重複関係からS D01よりも新しい。

S D03 三・六坪坪境小路西側溝である。南北方向の素掘りの溝で幅1.0m、検出面からの深さ0.25mである。溝心の国土座標はX=-146,365,000、Y=-17,391,570である。重複関係からS D01よりも新しい。埋土から奈良時代の土師器・須恵器、丸瓦・平瓦・軒平瓦6572D 1点、6721A 1点が出土した。

S A04 三・六坪坪境小路西側溝の西で検出した西側溝とS D05に挟まれる幅約2.5mの空閑地であり、三坪の東を限る築地塀が想定される。築地版築は残っていない。これに伴いS X08が構築される。重複関係からS D01よりも新しい。

S D05 S A04の西側で検出した南北方向の素掘りの溝。幅1.0m、検出面からの深さ0.3mである。三坪の東を限る築地雨落溝の可能性がある。重複関係からS D01よりも新しい。

S D06 S D01を埋め立てて作られた東西方向の素掘りの溝。幅1.0m、検出面からの深さ約0.3mである。重複関係からS D01よりも新しい。

S X07 S D06の溝底にある用途不明木材。計算上の三・六坪坪境小路心付近にあるので道路に渡っていた板材の可能性もあるが不明である。

S X08 丸太くりぬきの暗渠である。三坪内の排水用に作られた。S D03・05に対しほぼ直角に作られている。長さ約2.0m、外径約0.4mが残存している。これを半裁し中央部分を0.1～0.15m程掘り下げ水が流れるようにしている。暗渠の東側の底には埦および木を置いて沈まないようにしている。暗渠の底は西から東に向かって下り勾配である。S D01とは逆の勾配になっている。ということは三坪内から、三・六坪坪境小路に向かって水が流れていた。重複関係からS D01よりも新しい。

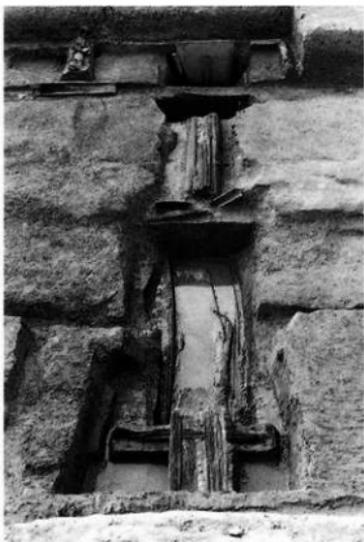
S X09 S D05内にある用途不明木樋。長さ約1.1m、幅約0.3m、高さ約0.2mである。断面形はU字形である。木樋の底は南から北に向かって下り勾配である。ということはS D06に流れていたことになる。また地山面と木樋の間には砂があり、固定の目的で用いられていたと思われる。

S X10 瓦片が帯状に集中する。崩形はなくS D06・S X09が埋まったのちの土に含まれる。軒丸瓦6320A c 1点が出土した。

(山前智敬)



免畑区金坑 (南から)



免畑区南半金坑 (東から)



S X08.S X07 (西から)



S X09 (東から)

12 平城京右京六条一坊十三坪の調査 第393次

1 事業名	給油所建設
2 届出者名	モービル石油株式会社
3 調査回数	平城京第393次調査
4 調査地	奈良市西ノ京町140-1
5 調査期間	平成9年12月22日～平成10年1月30日
6 調査面積	270m ²
7 調査担当者	秋山成人



8 調査概要

調査地は、平城京の条坊復元によると右京六条一坊十三坪の南西隅に相当し、調査地の南側を東西に延びる六条大路、西側に南北に延びる西一坊大路が想定され、調査地の西方には薬師寺旧境内が位置する。奈良市教育委員会が行った周辺での調査によると、調査地一帯は粘土探掘坑が拡がっており、平城京に関わる遺構が削平されているものと思われた。よって粘土探掘坑の拡がりを明らかにし、平城京の条坊と坪内の遺構の遺存状況を把握することを目的に調査を行った。

発掘区の基本的な層相は黒灰色土、赤灰色土、褐色土と続き地表下0.3mで灰褐色粘質土の地山に至る。地山上面の標高は発掘区西で56.4m、東で56.3m。西から東に下降する。遺構は地山上面で検出した。

検出遺構には、流路1条、六条大路北側溝、奈良時代の掘立柱建物1棟、平安時代の井戸2基、土坑2、室町時代の土坑1、発掘区のはほぼ全域に拡がる鎌倉時代と室町時代以降の粘土探掘坑がある。

SD01 発掘区西辺で検出した北から南西方向へ曲がる流路の東岸部分である。幅2.95m以上長さ16m、深さ0.95m以上である。埋土は上層から褐色土、黄灰色土、赤灰色土である。遺物は出土せず詳しい時期はわからないが遺構の重複関係から井戸SE05より古いことがわかる。

SD02 発掘区南辺沿いに検出した六条大路北側溝である。幅3.5m、長さ8.8m以上、深さ0.4mで、断面U字形を呈し、溝の西側は削平され残っていない。埋土は黄灰色粘質土である。溝内から奈良時代の土師器、須恵器、須恵器杯蓋を転用した硯が出土した。溝心の国土座標はX = -148,136.0 Y = -19,070.5である。

SB03 発掘区中央北側で検出した桁行2間以上、梁間2間の発掘区外東に延びる東西棟建物である。主軸は同上方眼方位とほぼ一致する。柱穴は後世の粘土探掘により削平されほとんど残っていない。柱間寸法は桁行3.15m等間、梁間2.1m等間である。

SE04 発掘区南側で検出した平面楕円形掘形の井戸である。規模は東西1.7m以上、南北2.5m、検出面からの深さ0.6mである。井戸枠はまなこの曲物を残し抜き取られていた。曲物内法は径30cmである。埋土は暗灰色粘土で、平安時代前半の灰釉陶器、緑釉陶器の小片が出土した。

SE05 発掘区南側で検出した平面隅丸方形掘形の井戸である。規模は東西3.1m、南北3.2m、検出面からの深さ1.86mである。井戸枠は上段が取り去られ残っていないが、これに伴うと思わ

れる径10～20cmの自然石が下段4本の隔柱各々の上部に接し据えてある。北西の隔柱に接し据えられた自然石西側では土(泥)塔の相輪部が出土した。下段は方形横板組隔柱横棧留で、内法1.05mである。井戸底には横板を固定するため径10～20cmの自然石を南東、南西、北西隔柱内側および南側板内側に据えてあり、東側板外側にも自然石を確認した。南側板内側の井戸底では銅鈴が出土した。枠内埋土は褐色粘土で、平安時代中頃の土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器の他、軒丸瓦、木錘、斎串、曲物が出土している。

SK06 発掘区東辺南よりで検出した平面不整形な土坑である。規模は東西2.45m、南北2.9m、深さ0.23m。断面皿状を呈する。埋土は黒色土(炭含む)で、平安時代中頃の土師器、須恵器、黒色土器の他、軒平瓦が出土した。

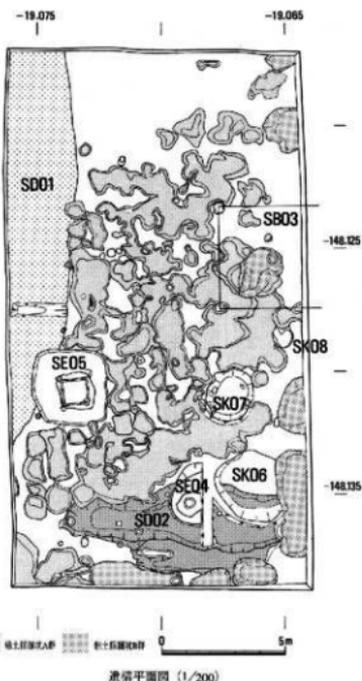
SK07 発掘区南側で平面楕円形の土坑を検出した。規模は長辺2.22m以上、短辺1.8m、深さ0.32mで、断面すり鉢状を呈する。埋土は上層が暗灰色土(炭含む)、下層が暗灰色粘土で、上層から平安時代後半の土師器、須恵器、瓦器の他、下層から埴、曲物が出土した。

SK08 発掘区東辺中央で検出した平面不整形な土坑である。規模は東西0.8m、南北0.9m、深さ0.11mである。埋土は灰色粘土で、室町時代前半の土師器、白土器が出土した。重複関係より粘土探掘坑A群より新しいことがわかる。

粘土探掘坑A群 流路SD01東側から発掘区内に拡がる灰褐色粘質土(地山)上で検出した平面不定形な土坑群である。続けて掘削されたらしく規模は一定でない。深さは検出面から0.1～0.2mと浅く、底はほぼ平らである。重複関係が見られず、茶灰色粘土一層で埋まっており、掘削後短時間に埋まったものと思われる。埋土から鎌倉時代の土師器が出土した。

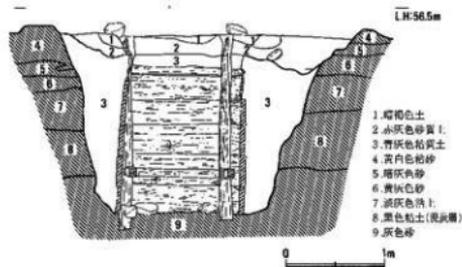
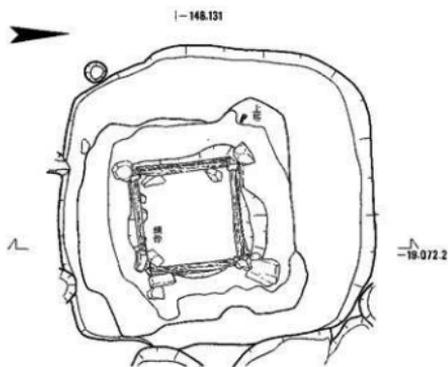
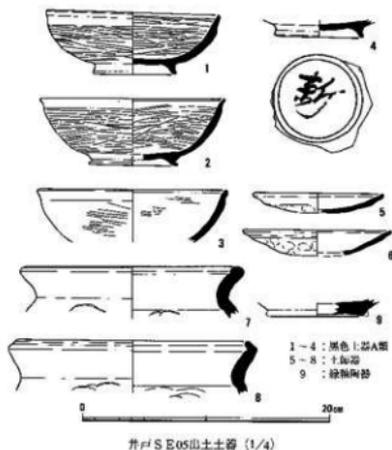
粘土探掘坑B群 発掘区東辺と南辺で検出した平面不整形な土坑群である。土坑は調査区外へ拡がり規模は確定しないが、一辺2.0～4.0m、深さ0.9mと深い。底はほぼ平らである。埋土は暗灰色粘土で、遺物が出土せず詳しい時期は不明である。重複関係から粘土探掘坑A群より新しいことがわかる。(秋山成人)

出土遺物には、遺物整理箱に7箱分の瓦埴類、3箱分の土器類、1箱分の木製品がある。今回の調査では井戸SE05から一括して貴重な遺物が出土した為これについて記す。瓦埴類には井戸枠内出土の平安時代以降の軒丸瓦・埴がある。土器類は土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器があり、掘形から出土の土器群と井戸枠内から出土の土器群に若干時期差がある。掘形のもの南

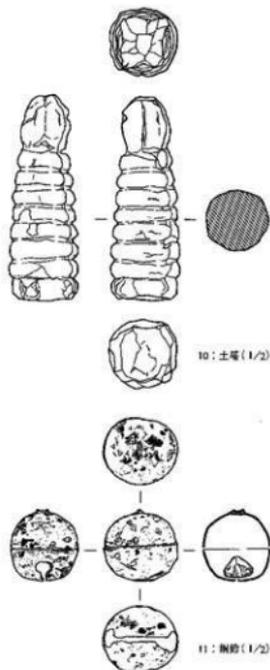


都Ⅱ期新段階～Ⅲ期古段階（9世紀末～10世紀前半）、井戸枠内ものは南都Ⅲ期古段階～Ⅲ期中段階（10世紀中頃～後半）頃と考えられる。掘形出土の土（泥）塔は水煙・宝輪・露盤からなる相輪部を表現しており、粘土を相輪の型に入れ、出来上がったものを、須恵質に焼き上げている。合わせた時の張出が側面に見られる。宝輪部は7つでその下に露盤を表現する為、焼成後に四面を打ち欠いたと思われる。高さ8.4cm、底部径2.6cmである。枠内出土の銅鈴は鈕の部分に欠損しているがほぼ完形で、扁平な球形をし下半は上半にくらべやや大きく上半の周縁を挟み込んでいる。下面には上部の鈕と直角に切り口が開く。鈴内には径約1.2cmの小石を入れ音を発する。径2.95cm、短径2.7cm、高さ2.9cm、重さ10.608gである。

（三好美穂・秋山成人・久保邦江）



井戸SE05平向・立面図 (1/50)



井戸SE05出土遺物



発掘区金巻（南東から）



発掘区南半部（西から）